Lifelong Sciences

Reconceptualization of development and aging in the super aging society

Newsletter vol.2
2022 March

2020年度～2024年度 学術変革領域研究（A）

生涯学の創出

――超高齢社会における発達・加齢観の刷新

学術変革領域研究（A）「生涯学」事務局
Email: lifelongsciences@gmail.com
https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp

多様な成長と変容を繰り返す
新しい「人間の生涯」の理解をめざして

領域代表　月浦 崇
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

65歳以上の高齢者の割合が総人口の28％を超えている我が国にとって、超高齢社会に対して社会全体としてどのように対応していくのかは、喫緊の解決が求められる重要な社会問題です。これまでは、人間の生涯は「成長から衰退へ」という単純な枠組みでとらえられてきましたが、人生100年時代の到来とともに、従来のような固定的な生涯観だけで人間の生涯を理解することは難しくなってきています。そこで本領域では、従来の生涯観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセス（下図）としてとらえ直すことを目的とした、新しい学際的研究領域である「生涯学」を創出し、研究を展開します。

そのために本領域では、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する予定です。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざしていきたいと思います。

目次
Contents

領域代表挨拶 …… 02
領域概要 …… 03

メンバー・インタビュー

Vol.1◆月浦 崇 …… 04
Vol.2◆柴田 悠 …… 08
Vol.3◆金子守恵 …… 11

研究班一覧

研究組織図 …… 14
計画研究班一覧 …… 14
公募研究班一覧 …… 19

2021年活動報告

東北大学社会教育主事講習への「生涯学」の導入 …… 30
「生涯学」第2回（2021年度第1回）領域会議を開催 …… 32
活動報告一覧 …… 34
業績一覧 …… 38

領域概要

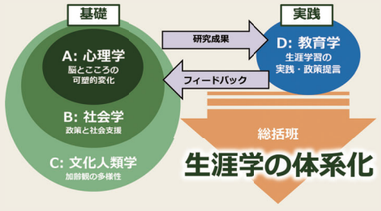
本領域の目的

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセスとして明示することを目的とする。そして、人間に関する多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざす。

本領域の内容

本領域では、既存の学問分野にとどまらない広範で多元的な研究を実施することで、従来の生涯観を刷新するための心理・社会メカニズムの解明とその社会実装を進める。

具体的には、高齢期でも獲得できる認知機能の性質と、高齢期には獲得しにくく衰退・消失してしまう認知機能の性質を若年者との比較の中で実験的に明らかにし、柔軟な可塑性が引き出されるメカニズムを明らかにする（認知心理学、生理心理学）。また、認知機能障害の実態とそれに関わる認知予備力について検討する（臨床心理学）。さらに、多様な実社会において、様々な世代や障害に対する適切な生涯観に依拠しつつ、新たな発達・加齢観の下で育まれる豊かな生涯を支えるために、効果的なソーシャルサポートとはどのようなものかを大規模社会調査から明らかにする（社会学）。そして、知識や技能の獲得過程と成熟過程もしくは消失過程が、文化や生活環境が違う場所でどのように発現しているのか、社会制度や生態環境によってどのような影響を受けるのか、多様な人類社会においてどのような発達観や加齢観、ライフサイクルがあるのかを多様な社会集団に対するフィールドワークから明らかにし、それらの比較を通して多様な生涯観を相対化することで、新たな生涯観を生み出す社会的要因とその可能性と限界を探る（文化人類学）。そのうえで、これらの基礎的知見を基盤としつつ、地域や個人に即した社会教育プログラムを実践することで、新たな生涯観の中で実現される社会教育プログラムを実装する（教育学）。このようにして、人間に関する諸科学、すなわち心理学、文化人類学、社会学、教育学等を融合して基礎から応用への展開を進め、さらにそれらの研究を循環させることで、従来の発達・加齢観を刷新する新たな「生涯学」を創出する（下図）。



期待される成果と意義

本領域の中心的な成果は、「生涯学」という新しい加齢観に根差した学際的な研究領域を世界に向けて確立することであり、超高齢社会に有益となる新たな生涯観を社会へ提供することである。すなわち、新しい生涯観に裏打ちされた人間発達の実態を明らかにすることで、生涯発達という発想を社会に広め、人間が年齢を重ねていく中でいかに柔軟性と多様性を持つ存在であるかを示せるはずである。また、脳機能の加齢による可塑的変化のメカニズムを理解し、それに基づいた教育法の開発も期待できる。それは同時に、新しい生涯観に基づく豊かな超高齢社会の実現に向けた科学的基盤を提供することでもある。

※本記事は生涯学ウェブサイト掲載のインタビュー記事（縮約版）のオリジナル完全版です。

メンバー・インタビュー Vol.1

「加齢＝衰え」とは異なる加齢観を紡ぎたい

月浦 崇

領域代表

生涯学プロジェクトの代表であり、脳と記憶を研究テーマとする生理心理班の代表でもある月浦崇さんに、「生涯学」というアイデアが生まれた経緯や生理心理班の研究について、そして、2021年秋に加わった公募研究が生涯学にもたらす新たな展開への期待を伺いました。

取材・構成：江口絵理
撮影：楠本 涼

――ご自身について教えてください。もともとは文系学部で障害の研究をされていたとか。

はい、東北大学の教育学部で障害児者心理学を学んでいました。障害の研究に関心をもったのは姉の影響でした。姉には脳腫瘍による脳機能障害があったのです。大学に入って希望通り障害児者心理学を専攻したものの、4年生のときに脳損傷の患者さんを対象とした研究室を選んだことが小さな転機となり、より神経科学の専門的な面から脳と心の関係を研究しようと大学院は医学系研究科に進学することにしました。以来、脳機能画像を手がかりとして記憶などの高次脳機能の神経メカニズムを調べる研究をしています。

――どうしてこのプロジェクトの代表に？

最初にこの「生涯学」の発端となる研究プロジェクトを発案したのは、霊長類を対象として神経可塑性の研究をされていた杉田陽一さん（早稲田大学）と、げっ歯類で記憶の神経モデルの研究をされていた櫻井芳雄さん（同志社大学。当時は京都大学）でした。お二人とも、その分野の先駆的な研究者としてよく知られている方です。

そこに、ヒトを対象とした脳機能画像研究を専門とする私や、発達心理学や臨床神経心理学を専門とする研究者が加わり、初期の構想がスタートしました。

しかし採択に向けて準備を進めている最中に、リーダーである杉田さんが病気で急逝されてしまいました。そこで立ち上げ時からのメンバーの一人である私が領域代表を引き継ぐことになったのです。

その年は科研費の審査に通らず、翌年の再挑戦で採択されましたが、ケガの功名というべきか、始動まで時間がかかった分「私たちが目指す『生涯学』とはなにか」をメンバー間で議論する機会を多く持つことができ、コンセプトがより深く共有されたように思います。

「記憶は、加齢による脳の器質的変化と社会的要因の相互作用で変化を起こすと考えられます。」

――生涯学で謳っている「従来の加齢観の刷新」とは？

人間は、生まれて、成長して、やがて衰え、命を終える。これがもっともシンプルで一般的な生涯観だろうと思います。たしかに、生物学的に見れば脳の構造は加齢とともに衰えています。私の専門である記憶の研究から見ても、加齢につれて記憶力が低下するのは事実です。社会でも、老いることは「能力を失うこと」だと捉える場面が多く見られます。社会制度上も、高齢者は守られるべき「弱者」として扱われています。

しかし、人間の人生は従来のように60年、70年で終わるものではなくなりつつあります。人生100年時代において、何十年にもわたる高齢期をただ「衰えていくだけの期間」だと捉えていていいものでしょうか。

実は生涯学というアイデアの原点は、先ほどお話した櫻井先生のラットの脳の研究でした。

ラットも人と同様に、高齢になると身体にガタが来て動作も遅くなり、いろいろなことが覚束なくなってくるのですが、実験でラットの脳とコンピュータを直接つないで（「ブレイン・マシン・インターフェース」と言います）、身体動作を介さずに神経活動を取り出してみたら、驚くことに、若い時と同じような認知機能を保っていることが分かったのです。

つまり、高齢になったからといってすべてが衰えるわけではなく、認知機能として残っていても十分に発揮されていない能力がある、ということです。それはヒトでも同じではないか？　ヒトを対象にして科学的にちゃんと追求してみよう、というのが始まりでした。

――脳の働きやメカニズムを研究する分野だけでなく、社会学や文化人類学も含まれているのはなぜですか？

そこが非常に大事なところで、私が研究している「ヒトの記憶」を例としてお話ししますと、加齢とともにすべての記憶力が一様に落ちるわけではないんです。たとえば、ひとりで黙々とこなした物事については忘れやすいけれど、誰かと一緒にとりくんだ物事は記憶にとどまりやすかったりします。

すなわち、記憶は加齢による脳の器質的な変化と、他者との関係のような社会的要因の相互作用で変化を起こしていると考えられる。「心を強く揺さぶられる出来事だとよく覚えている」といった個人の内面の要因、その時の体調の良し悪し、騒音や匂いといった外部要因なども大きく作用します。

生物学的な加齢による脳の変化はこれまでもずっと研究されてきました。社会関係や外部環境が人生にどんな影響を及ぼすのかという問いは社会学でずっと研究されてきました。しかし、両者を組み合わせて「加齢による変化」を追求しようという研究はほとんどありません。各々の分野の中だけでは扱いきれないからです。

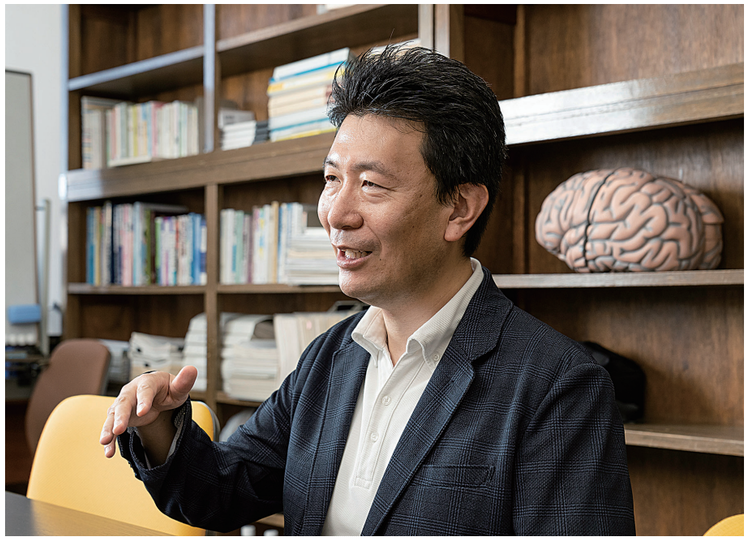
また、文化人類学は社会の多様なあり方を描き出す学問であり、現代日本の加齢観とは異なる加齢観をもつ社会があることを教えてくれます。たとえばエチオピアのある地域のフィールドワークによれば、高齢か若年かにかかわらず土器職人がその地域に欠かせない役割を担ってい

“基礎研究で得られた知見を、生涯学習の現場を通じて社会に還元していく形を目指しています。”

て、「加齢＝衰え」という単純な図式に当てはまりません。

このように、脳のメカニズムを探る実験心理学があり、それを包み込むように個人と社会との関わりを見る社会学があり、その外側に社会や文化の多様性をあぶり出す文化人類学がある。その3層でプロジェクトを形成しています。

そして、この3層で積み上げた基礎的な知見を社会に還流するための研究班があることもこのプロジェクトの大きな特徴です。



――東北大学を拠点とする教育班ですね。

社会教育・生涯学習を専門とされている石井山竜平さん（東北大学大学院教育学研究科准教授）のところに、心理学、社会学、文化人類学の各領域から加齢や生涯観に関する基礎研究の知見が提供され、生涯学習の現場を通じて社会に還元されていく形を目指しています。

たとえば、「ひとりで作業するよりほかの人と作業するほうが記憶はよく定着する」という知見が実験心理学の研究班の成果として出てきたら、それを石井山さんが担当している社会教育主事講習で紹介する。社会教育主事とは地域の生涯学習のリーダーですので、その知見を社会につなぐルートになると期待しています。

個々の成果だけでなく、「『加齢＝衰退』ではない」という生涯学のコンセプトを、この講習を通じて社会教育に関わる方に知っていただくことも大きな目標のひとつです。

東北大学の石井山さんに参画していただいたのは、東日本大震災からの東北復興と高齢化の進行は密接な関係があると考えたからです。もし加齢＝衰退と考えるなら、高齢化が進む地域を多く抱える被災地では復興などしなくていいという話にもなりうるでしょう。しかし、生涯学が見出す新たな加齢の姿が、高齢化が進む地域の復興のあり方を提案できるかもしれない、と思っているのです。

――では、月浦さんの研究班（生理心理学）ではどのような研究をされるのですか？

健康な20代（主に大学生）と、健康な高齢者（主に60代以上）の脳のfMRI（機能的磁気共鳴画像）を比較しながら、加齢にともなう記憶の変化とその基盤となる脳のメカニズムについて調べています。

よく覚えているときに共通する条件があったり、同じ高齢者でもよく覚えている人と忘れている人の差がどこにあるかなどを検証していくと、単に「若ければよく覚えていて高齢だと忘れやすい」だけではないことが見えてきます。

ただし、脳機能画像でわかるのは相関関係までです。脳のAという状態と忘れやすいという現象に関連があることはわかっても、Aだから忘れやすいのか、忘れやすいからAなのか、別の原因があるのかまではわかりません。そうした因果関係を知るために、脳に損傷を受けた方や疾患を持つ方の記憶検査によって、脳のどの領域が損傷されるとどんな記憶ができなくなるのかを探る研究との二本柱で進めています。

――研究班同士はどのように連携していくのでしょうか。

本格的な連携はこれからですが、私の班がfMRIで「共感と幸福感（well-being）と脳の状態」の関連を調べた研究の成果をほかの班の方々と共有したところ、well-beingをテーマに研究している社会学の柴田悠さん（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）が興味を示され、その知見がこのプロジェクトの社会調査に反映された、という例が生まれています。

また、研究成果や新たな生涯観を生涯教育の現場に伝えると同時に、現場からのフィードバックもあるでしょう。そうした基礎研究と社会との循環も作りたいと思っています。

――創設時の8つの計画研究に加え、2021年には公募研究が始動したそうですね。

生涯学には「○○を解決する」「■■を実現する」というような明確なゴールはありません。加齢観を刷新するといっても、どう刷新していくかは研究次第です。あいまいに見えるかもしれませんが、懐が深いプロジェクトであり、可能性が広く開かれています。

そのような場をうまく使っていただくことを期待して研究プロジェクトを公募したところ、多くのユニークで有望な研究提案が寄せられ、2021年度には前期の2年間の公募研究として22件を採択（うち1件辞退）しました。公募研究は、生涯学という船に乗ってくるお客さんではなく、むしろ率先して今後の生涯学の姿を形作っていく研究になるだろうと思っています。

――どのような研究が選ばれたのでしょうか？

思春期から高齢期に至る脳の変化を基盤としたコホート研究や、百寿者（100歳以上の方）のような超高齢期の方が自立するために重要な認知機能と周囲のサポートとの関係を検証する研究、医学的な側面から女性の生涯に目を向けた研究や自閉症や認知症を対象とした障害の研究、夢の解析や運動機能の観点から生涯学へアプローチする研究など、既存の学問領域の枠に収まらない独創的な発想の研究が目白押しです。

今後もウェブサイトやニューズレターで研究テーマや成果をご紹介していきますので、楽しみにしていてください。

“人生100年時代、高齢期をただ「衰えていくだけの期間」だと捉えていていいものでしょうか。”

月浦 崇（つきうら たかし）
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

宮城県出身。東北大学教育学部から同大学大学院医学系研究科博士課程に進み、2001年博士号取得（障害科学）。独立行政法人産業技術総合研究所脳神経情報研究部門研究員、デューク大学（アメリカ）認知神経科学センター客員研究員、東北大学加齢医学研究所准教授を経て京都大学大学院人間・環境学研究科准教授に着任。2017年より現職。fMRIなどの脳機能イメージングや脳損傷患者への神経心理学的方法、健常者への実験心理学的方法等の多様な手法を組み合わせてヒト記憶の脳内メカニズムを研究している。

生涯学ウェブサイトでは定期的に各研究班の代表者へのインタビュー記事を掲載しています。今後も新しい記事が公開されていきますので、ぜひご覧ください。
https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp/

幼少期の経験や受けたサポートが、その後の生涯に与える影響とは

人が幸せに生きられる社会とはどのような社会なのか、
という問いを社会学者として研究してきた柴田悠さんに、
生涯学プロジェクトが立ち上がったことで
可能になった日本初の大規模調査とその意義について伺いました。

柴田 悠
B02（ウェルビーイング）班代表

取材・構成：江口絵理
撮影：楠本 涼

柴田さんはどのようなご研究をされてきたのでしょうか？

学生のころから、自分自身や身近な人々の抱えている生きづらさを実感するにつれ、それはいったいどこから来ているのか、どうしたら軽減できるのかを研究したいと思っていました。そのために社会的な要因を調べようと、社会学の分野に入りました。

裏返して言うなら、「人々が生きやすい（＝ウェルビーイングの高い）社会」とはどんな社会なのかを探る研究です。

さまざまなテーマで研究をしてきましたが、たとえば今は、「幼少期に保育所や幼稚園に通ったこと、つまり保育・幼児教育という公的サポートを受けたことが成人後のウェルビーイングにどんな影響を与えているか」を研究しています。

ただし日本には、そうした長期の影響を見ることができる追跡調査のデータがありません。欧米では1980年代前後から大規模な追跡調査が行われ、データが蓄積されてきましたが、日本では2001年から厚生労働省が始めたのが最初で、20歳までのデータしかありません。

そこで、生涯学プロジェクトで私は、幼少期から現在までの経験を詳しく質問する、日本で初めての大規模調査を行うことにしました。成人の人々に、生まれ育った家庭の状況や幼少期から現在までのさまざまな経験について答えてもらう調査です。すでに予備調査としてweb調査を行い、全国20～69歳の2万人から回答を得て、分析を進めています。

“保育・幼児教育とウェルビーイングの関係を探る、日本初の大規模調査へ”

生涯学プロジェクトでは「ウェルビーイング班」の代表もお務めですが、この班ではどのような研究をしているのでしょうか？

幼少期以降に経験した「家庭や地域の状況」や「公的サポート（保育・教育・職業訓練・介護など）」と、現在の本人の生活状況やウェルビーイングがどう関係するか、を見ています。

私は主に「幼少期（とくに0～2歳）に受けた公的サポート（保育・幼児教育）」の効果を研究していますが、班のメンバーには、家族や友人、地域などからの「私的サポート」や、「現在受けている公的サポート」に注目している人もいます。

保育・幼児教育の効果についていえば、欧米の先行研究では、「社会経済的に不利な家庭（以後、「不利家庭」）に生まれた子どもは、幼少期に保育所や幼稚園に通うと、その後の教育達成や所得が高くなる」という傾向が男女ともに確認されています。

では日本ではどうでしょうか。今回の予備調査のデータを分析したところ、男性では欧米と同様の傾向が見られましたが、女性では見られませんでした。

そのかわりに、日本の不利家庭出身の女性では、「他者の不安によって自分の気持ちが乱されにくいという心理特性」が、有利家庭出身の女性と同じくらいに強くなっていました。先行研究では、「この特性が強い人ほど幸福感が高い」ということが知られています。

つまり、日本の女性では、保育・幼児教育によって、社会経済地位の面ではなく心理特性の面で、「生まれの格差」が縮小されていたのです。これは、先行研究では見られなかった新たな知見になりうると考えています。

また、「幼少期に親から虐待を受けると、将来自分が親になったときに子に虐待をしてしまう確率が高まる」という「虐待の連鎖」は大きな社会課題です。こうした連鎖はどのようなサポートによって減らすことができるのか。これも日本の調査研究ではまだ明らかになっていないため、今回のweb調査のデータをいま、班のメンバーが分析しています。

ほかの班とのコラボレーションはどのように進められていますか？

私たちの班が「幼少期から高齢初期までの経験とウェ

ルビーイング」を研究するのに対し、同じ社会学分野の筒井淳也さんの班は「高齢期の社会参加」について研究しています。この2つの班で、人の生涯の全体をカバーする形ですね。

また、fMRIによって脳機能を調べている月浦崇さんの研究には、とくに刺激を受けています。

さきほど、日本の不利家庭出身の女性では、保育・幼児教育によって「他者の不安に惑わされにくい心理特性」が強まった、という私たちの班の知見を紹介しました。実はこの心理特性についての質問項目を今回の予備調査に入れたのは、「生涯学」プロジェクトで月浦さんたちの研究を知ったことがきっかけでした。

月浦さんたちは、成人の脳において「『他者の不安に惑わされにくい心理特性』が幸福感を高めるメカニズム」を担っている脳機能ネットワークを初めて発見しました。

「不利家庭の子どもが保育・幼児教育を受けると、感情制御などの社会情緒的能力が高まる」ということは先行研究で知られていましたが、成人後の社会情緒的能力への影響は、「犯罪行動」や「健康的行動」などの行動レベルでしか確認されておらず、心理レベルでの影響ははっきりしていなかったのです。

今回、月浦さんたちの研究から刺激を受けて、この心理特性の質問項目を予備調査に入れることで、私たちの班は新たな知見を得ることができました。「生涯学」での学際交流の成果の一つといえるでしょう。

――「生涯学」プロジェクト全体の目的には、どのように貢献していかれるのでしょうか？

「発達・加齢観の刷新」が本プロジェクトの目的ですが、その目的を達成するには、「幼少期からの経験や受けたサポートが、その後の生涯に長期的にどのような影響を与えるのか」を明らかにすることが欠かせません。私たちの班はまさにその解明によって、「生涯学」領域に貢献したいと考えています。

またそれが解明できれば、「不利な家庭に生まれた人々に対して、どんなタイミングでどんな公的サポートや私的サポートを提供すれば、その不利を軽減できるか」といった実践的なヒントを得られるでしょう。私たちの班の研究がそんな形で、人々の生きづらさを和らげるのに役立てば、と願っています。

柴田 悠（しばた はるか）
京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授

東京都出身。京都大学総合人間学部から大学院人間・環境学研究科に進み、2011年博士号取得。就労支援政策が自殺率を減らす効果や、保育政策が社会や個々人に与える効果についての分析を重ねてきた。2017年、社会政策学会学会賞受賞。著書に『子育て支援が日本を救う――政策効果の統計分析』（勁草書房）、『子育て支援と経済成長』（朝日新書）など。同志社大学准教授、立命館大学准教授を経て現職。

メンバー・インタビュー Vol.3

「老いとのつきあいかた」のフィールドワークから報告 多様さを

アフリカやアジアなど世界各地でフィールドワークを重ねてきた研究者が集まる技能発達班。代表を務める金子守恵さんに、文化人類学的な研究が生涯学プロジェクトにどのような役割を果たすのか伺いました。

金子守恵 C01（技能発達）班代表

取材・構成：江口絵理
撮影：楠本 涼

――技能発達班は、研究対象とする国のバリエーションが豊かですね。

「国」というよりは「村」や「町」でフィールドワーク（現地調査）に取り組んでいる人が多いです。わかりやすく国名で言うと、韓国、インドネシア、エチオピア、ケニア、タンザニア、ギニアなどアジア・アフリカの各地を対象にしています。生涯学プロジェクトの文化人類学分野には技能発達班とヒトモノ班の2班があって、ヒトモノ班のメンバーは主に日本やオセアニアで調査を行なっています。

技能発達班では主に職人や音楽家など、なんらかの身体的な技能をもつ人々の行動を観察することで、人々が加齢をどのようにとらえているか、どのように自分の身体とつきあっているかを分析・考察していこうとしています。私自身はエチオピアで土器職人を対象としたフィールドワークに取り組んできました。

――金子さんの研究をより具体的に教えていただけますか。

私が調査している村では、どの家でも驚くほど数多くの土器を所有し、調理の際に使い分けています。その土器を作っている職人はすべて女性で、土器職人の家に生まれた女の子はみな職人になります。母親は娘に作り方を積極的に指示するといった教え方をしません。少女たちは、共通の成形段階を経て土器を製作すると同時に、幼い時から一人で試行錯誤して、彼女たちが述べる「自分の手」に合わせた手順を編み出していきます。

年齢や経験が評価軸にならない、エチオピア土器職人の生活文化

彼女たちの技術や考え方において、何が新しく生み出され、何がどう継承されているのか。そうした技術や考え方はいったいどういう仕組みで作り出されているのかを明らかにしたいと思って研究を進めてきました。

筋力や反射神経は加齢とともに衰えるものの代表ですが、同じく身体の動きでも、職人などの技能はむしろ、経験の蓄積によって上がっていくと言われます。「加齢＝衰退」という生涯観を覆す事例を提示するのがこの班の役割でしょうか？

加齢にまつわる多様な価値観を世界中から集めてきて提示することで、日本で主流の生涯観を相対化する、という貢献はできると思います。ただ私は、「加齢＝衰退」という生涯観に「加齢＝（知識や経験の）蓄積」という生涯観を対比させるだけだと、文化人類学としてはあまり新たな発見がないようにも思っているんです。

年長者ほど経験や知識が蓄積されていくために敬意を払われたり、社会的に重要な役割を担っている、というモデルは、これまでにも数多く報告されてきました。「長老制」などはその一例といっていいでしょう。

ただ、「加齢＝衰退」と「加齢＝（知識や経験の）蓄積」はどちらも、加齢を軸にしてネガティブとポジティブを反転させただけですよね。私の調査地では、年配で経験値が高く、技術も高いはずの土器職人に「こういう土器がほしいのだけれど」と頼むと、「私には作ることはできない。○○さんのところへ行きなさい」と当人より年下の職人を勧められることがあります。つまり評価軸が、年齢を重ねたことによる技術の高さではない。

加齢が強く関わりそうな動作（身体技法）であっても、年齢や就業年数が評価軸とならない人々の生活文化やそれを支える考え方がある、ということを提示するのも、技能発達班のできることではないかなと思っています。

よく、儒教の影響が強い韓国では年長者を敬う文化があり、アメリカでは若さに大きな価値が置かれる、などと聞きますが、そのどちらかではなく、必ずしも年齢にとらわれない文化を見せるということですか？

そうですね。ただ、文化人類学に対して「この国の人はこうで、あの国の人はこう」という知見を期待したい気持ちはよく理解できるのですが、実は文化人類学的な研究にたずさわる者として一番抵抗を感じるのは、「この国はこうだ」というような過度の一般化なんです。

国という大きな単位に限りません。私が見ている地域に何か特徴的な価値観や習慣が見えてきたとしても、それは、世界の人が同じように同時代的に経験している変化の影響を受けて出てきたものかもしれないし、あるいはその地域やその人の属性に共通のものではなくて個人的な違いかもしれない。「エチオピアではこうだ」とか「こうなるのは女性だからだ」とは言えないことも多いんです。

とはいえ、すべてを「人それぞれであって、地域や国で一般化できない」と言ってしまうと、「人間の加齢」という抽象化したテーマをもつこのプロジェクトでは他の分野との対話や連携が難しくなるような気もしますが……。

ざっくりとした印象による一般化は避けたいですが、同じ地域で暮らし、環境や時代を共有していることで人々の考え方や生活の仕方になんらかの傾向性が出てくることはあると思っています。それを、フィールドワークで観察した事実によって語ることはできると思います。

たとえば、私のフィールドでは寝たきりの高齢者は皆無で、それは事実です。もちろん誰もが加齢とともに体力などが減退してくるのですが、どうやりくりして生きていくかというと、その高齢者の子ではなく、孫が同居を始めます。そのとき、孫が一方的に自分の生活を犠牲にして高齢者の世話をするのではなく、お互いがお互いのできることを補いながら生活する。

老いてしまったら「何もできない人」になるのではなく、家族でそれぞれができることを持ち寄りながら生きていく。そうした「老いとのつきあいかた」の多様さをフィールドワークから報告できるのではないかと思っています。

文化人類学は仮説を設定してそれを検証する学問ではなく、フィールドワークが出発点で、「なぜこの人たちはこういうことをするんだろう？」「なぜこう考えるんだろう？」という問いに対して仮説を推論しながら検証していくというアプローチをとります。

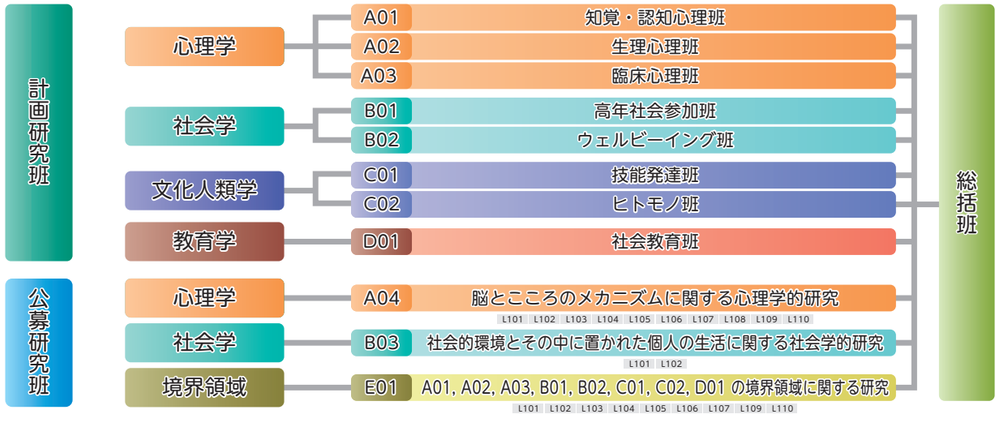
もしかしたらそこが、この領域のほかの研究班との大きな違いかもしれません。仮説検証型の研究をされている方々と議論をかみあわせるには、まずは共通の基盤をつくるところから始める必要があるだろうと思っています。

高齢者を対象とした医学的な研究では、高齢者の状態を「運動能力」「認知能力」「社会性」などに分けて評価するので、その枠組みを参考にした簡易の調査票とフィールドワークを組み合わせるような調査方法を確立できないか検討しています。生涯学向けにアレンジして技術発達班の各フィールドで調査してみよう、といった試みを始めています。まだまだ、これからですが。

金子守恵（かねこ もりえ）
京都大学アフリカ地域研究資料センター／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授

北海道出身。アフリカ、エチオピアで土器つくりの技法の伝承と学習について、とくに身体技法に着目して調査研究を進めてきた。地域の資源を用いた製品製作など実践的な活動にも従事しつつ、技術の導入や村人によるそれらの受容の仕方を検討したり、それらの技法や知識を共有したり再配分するグループの形成過程にも注目してフィールドワークを行なっている。京都大学人間・環境学研究科助教を経て、2016年より現職。著書に『土器つくりの民族誌――エチオピア女性職人の地縁技術』（昭和堂）。

研究組織図



計画研究班—覧

A01 知覚・認知心理班（認知心理学）

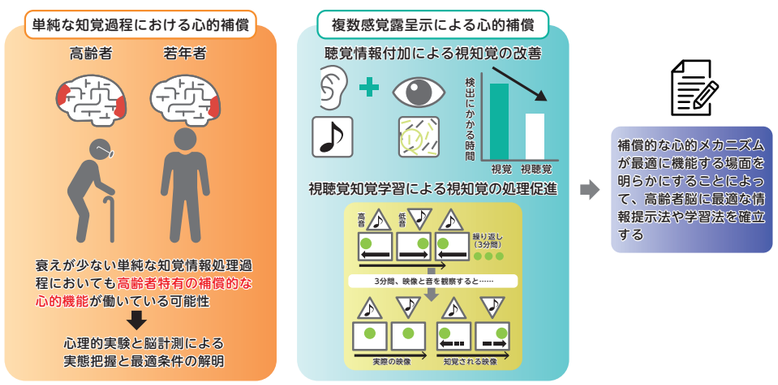
知覚系の知識獲得機構の加齢変化

代表者
寺本 渉
熊本大学大学院
人文社会科学研究部
教授

分担者
日髙 聡太
立教大学現代心理学部 教授
川越 敏和
東海大学
スチューデントアチーブメントセンター
講師

研究概要

高齢者では老視や老人性難聴、注意機能低下など、知覚・認知レベルでの機能低下が顕著である一方、自動的かつ無意識的な処理はある程度維持されている。しかし、高齢者で維持されている機能が必ずしも若年者と同じ心的メカニズムで実現されているわけではない。実際、高齢者は「見る」という日常的な行為であっても、別の感覚情報を若年者よりも多く利用し、補償しているという報告がある。本研究では、特に複数感覚情報の処理に着目し、そのような心的機能の存在を確認し、そのメカニズムを明らかにする。そして、高齢者、ひいては人間が本来もつ知覚・認知の可塑性を最大限に引き出し、より豊かな生活をおくるための方法を提言する。



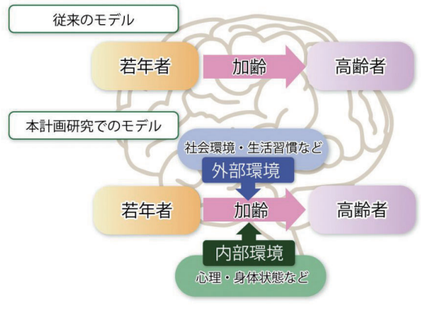
A02 生理心理班（生理心理学）

記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構

代表者
月浦 崇
京都大学大学院
人間・環境学研究科
教授

研究概要

本計画研究では、ヒトの記憶の加齢による経年変化を脳の器質的変化だけで説明するのではなく、他者との社会的関係性や生活習慣などの外部環境や、身体状態や感情などの内部環境との相互作用の中で、どのように脳内メカニズムが可塑的に変化するかの視点から解明することを目的とする。その目的を達成するために、若年成人と高齢者の脳活動や脳構造を多角的な脳画像研究法から検証する生理心理学的研究を実施する。さらに、脳画像研究で得られた知見の機能的妥当性を明らかにするために、神経疾患患者を対象として、記憶と環境との相互作用に関連する機能低下の特徴を神経心理学的手法によって検証する。これらの研究から、環境との相互作用の中で可塑的に変化する高齢者の記憶機能の特徴とその脳内メカニズムを明らかにする。この成果を通して、社会の中で生活する高齢者においても、新たな知識や技能を獲得することが可能であることを科学的に証明することにつながり、従来の加齢観を刷新する高齢者の新たな可能性を証明することになる。



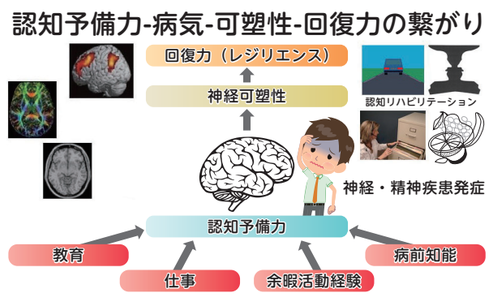
A03 臨床心理班（臨床心理学）

認知機能からみたこころの健康へのアプローチ ——予防とレジリエンスのために

代表者
松井三枝
金沢大学国際基幹教育院
臨床認知科学
教授

研究概要

認知機能という観点から、思春期から成年早期に変化が認められる統合失調症および青年や成人とくに高齢期までの脳器質性疾患、認知症や気分障害について検討する。これらの疾患では認知機能障害がしばしば認められることが知られており、日常生活機能や精神機能の維持および社会復帰には認知機能の問題が大きいと考えられる。予防的な観点から、青年や健常成人のメンタルヘルスと適応性の調査を行ない、認知予備力や認知機能活性の介入による効果を検討する。さらに、神経疾患、脳損傷患者および精神疾患の認知の障害される機能と温存される機能を明らかにする。また、これらの患者の認知機能と認知予備力の関連を検討し、社会復帰や術後回復力の予測データを構築する。さらに、認知機能・認知予備力と脳構造・脳機能との関連を検討することにより、神経可塑性への寄与を明らかにする。このことにより、新しい生涯観の下で人間の一生を支える脳とこころの機能維持に資する機構の解明に寄与することをめざす。



B01 高年社会参加班（社会学）

高齢者の社会参加の家族的・社会的条件の探索

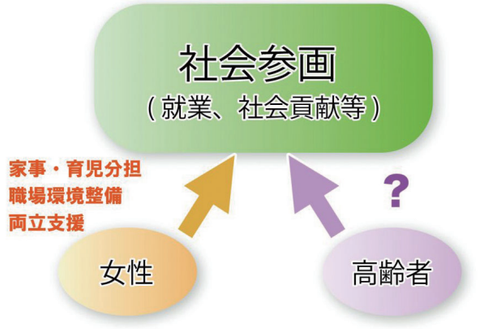
代表者
筒井淳也
立命館大学
産業社会学部
教授

分担者
菊澤佐江子
法政大学社会学部 教授
竹内麻貴
山形大学人文社会科学部 准教授
田中慶子
慶應義塾大学経済学部 特任准教授
渡邉 大輔
成蹊大学 文学部 教授

研究概要

本研究では、「生涯学」の重要な課題のひとつとなるであろう高年期の社会参加について、社会調査を通じて探索することを課題としている。

20世紀後半から、経済先進国では「女性の社会参加」が重要課題となってきた。しかし少子高齢化が進む日本では、女性のみならずその他の社会グループにおいても、有意義な社会参画が進められることが望ましいと考えられる。ただ、その社会的条件については、体系的な研究がまだ十分に進められていない。



社会的条件というのは、身体能力・認知能力で問題のない場合でも必要なものである。たとえば女性は、能力の面で男性と同等でも、家族のケア負担や家族支援制度次第では、十分に活動することができない。同様に高年期グループでも、その潜在能力を十分に発揮し、人生を楽しむことができる条件があるはずである。そういった条件の探索を通じて、「生涯観の刷新」という領域課題に貢献する。

B02 ウェルビーイング班（社会学）

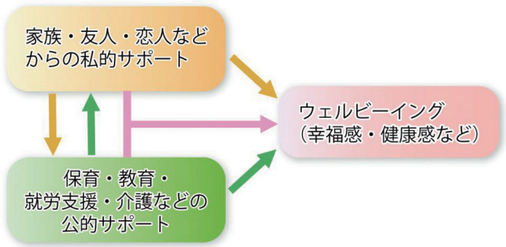
ウェルビーイングの規定要因に関する実証的研究

代表者
柴田 悠
京都大学大学院
人間・環境学研究科
准教授

研究概要

本研究では、本領域「生涯学」がめざす「豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明」とその成果の「社会実装」に向けて、現代日本社会における「豊かな人生」つまり「ウェルビーイング（幸福感・健康感など）の高い人生」の社会的要因をさぐる。

具体的には、生涯全体にわたる視点から、私的・公的サポートとウェルビーイングの関係に着目する。つまり幼少期から青年期、壮年期、高齢期にかけて、ライフステージの各時期にどのような私的サポート（家族や友人など身近な人からのサポート）や公的サポート（保育・教育・就労支援・介護など）を受けることが、その後の人生でのウェルビーイングにどのように影響するのかを検討する。



そのために、生涯の各時期に受ける私的サポートと公的サポートを詳細に把握する、日本で初めての大規模な質問紙調査を実施する。それにより、どのような社会関係や支援が「ウェルビーイングの高い人生」をもたらすのかを検証し、実践的・政策的示唆を得ることをめざす。

C01 技能発達班（文化人類学）

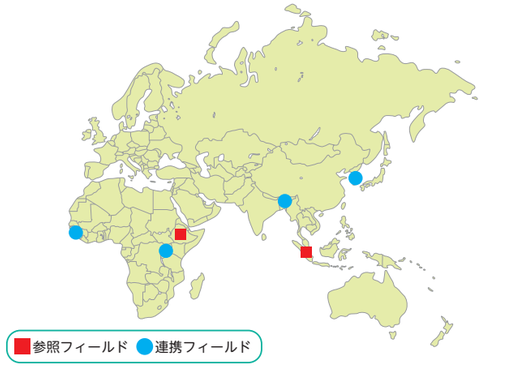
技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究

代表者
金子守恵
京都大学
アフリカ地域研究資料センター
准教授

分担者
重田眞義
京都大学アフリカ地域研究資料センター 教授
山越 言
京都大学ASAFAS 教授
伏木香織
大正大学 教授
座馬耕一郎
長野県看護大学 准教授

研究概要

本研究は、アジアやアフリカ諸地域に暮らす技能集団が身体を通じて暗黙知を体得する過程に焦点を当て、担い手たちの1）生物学的発達を示す行動調査、2）身体技法の習熟度、3）発達段階の文化的制度化の相関性について精査し、文化人類学的な比較検証を行う。アジアやアフリカのさまざまな地域に暮らす技能集団を対象に、彼女/彼らの身体技法（伝統的な身体の動かし方の様態）に注目して、それらの行動に必要な技能を獲得・熟練させる一連の過程（＝習熟過程）を質的・量的な尺度で記録・分析し、それらが当該社会における発達段階とどのように関連しているのかを示す。それらの一連の事例研究を、生存に関わる行動ユニット（分担者：重田眞義、山越言）と表現に関わる行動ユニット（分担者：伏木香織、座馬耕一郎）の二つのユニットにわかれて分析検討しながら、多元的な発達過程を描き出し、「生涯学」が目指す従来の生涯観を刷新することに貢献する。



C02 ヒトモノ班（文化人類学）

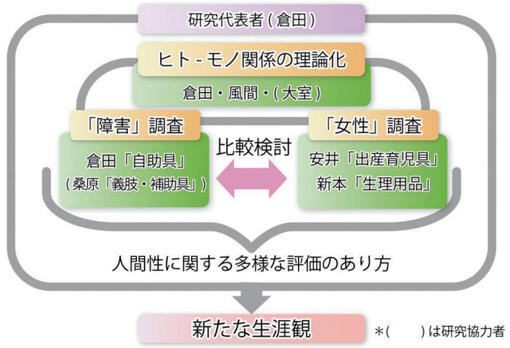
生涯を通したヒト-モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究

代表者
倉田 誠
東京医科大学医学部
准教授

分担者
風間計博
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
安井眞奈美
国際日本文化研究センター 教授
新本万里子
国立民族学博物館 研究員

研究概要

本研究班では、日本やオセアニアの諸社会において身体や認知の障害を軽減したり、性差による生理的変化や社会的役割に対応したりする際に使用・装用されるモノに着目し、1）それらが社会に導入され個々の身体に馴染んでゆく過程、2）それらを用いる人びとの用法や動作の変化、3）それらを身につけ用いながら生きてゆくことに対する社会的評価、を行動観察やインタビューを主とした継続的な参与観察により明らかにする。障害や性差といったそれぞれの身体や生活の状況に応じたモノとの関わりに焦点をあてることで、成長から衰退へといった一元的な発達モデルを問い直すとともに、各社会の事例から新たな生涯観を打ち出す鍵を探り出す。



社会教育班（教育学）

D01

生涯学習に関する国家政策および地域主導計画の東アジア的視座からの検証

撮影：桂嶋啓子

代表者

石井山竜平

東北大学教育学研究科
准教授

分担者

上田孝典
筑波大学人間系 准教授

李 正連
東京大学大学院教育学研究科 准教授

上野景三
西九州大学子ども学部 教授

山口香苗
早稲田大学総合科学学術院 助教

西川一弘
和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 准教授

小山竜司
神奈川大学法学部 教授

松本 大
東北大学大学院教育学研究科 准教授

研究概要

本研究の目的は、本領域における心理学・社会学・文化人類学からなる一連の計画研究から得られた知見を、各自治体の社会教育・生涯学習の担当職員や教職員むけの講習・研修プログラム、およびこれからの生涯学習計画にパイロット的に実装化することにある。並行して、1）隣国（東アジア）と日本における生涯教育政策・実践を比較検証しつつ、2）地域主導の生涯発達支援の新展開や、学校教育を包含した統合的な地域人材育成計画の新展開に加担していくことで、政策と実践の双方への実装を目指す。

総括班

生涯学の創出――超高齢社会における発達・加齢観の刷新

代表者

月浦 崇

京都大学大学院
人間・環境学研究科
教授

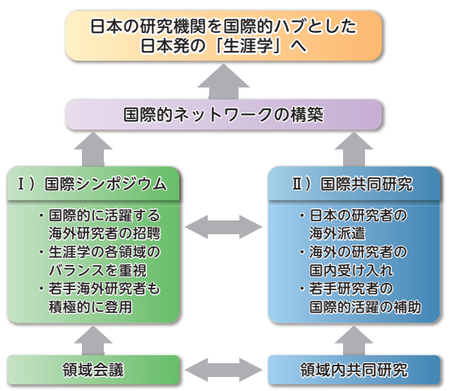
研究概要

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な生涯観を刷新し、その成果を社会へ還元していくことをめざしている。そのために、総括班では以下の３つの方策を推進する。

1）定説を打ち破り、新たな「生涯観」を提唱する
・領域代表者による各計画研究のマネジメント支援
・若手研究者に多くのチャンスを与えるような公募体制の構築

2）多様な研究領域を連携・融合する
・年２回の領域会議の開催
・領域内交流プログラムの運営

3）新しい研究領域としての「生涯学」の国際的プレゼンスを高める
・国際シンポジウムの開催
・国際共同研究の推進（若手研究者の双方向的な国際交流）
・国際研究発表の補助



公募研究班一覧

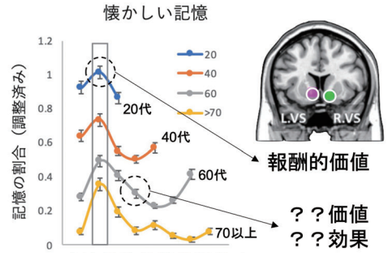
A04 脳とこころのメカニズムに関する心理学的研究

A04-L101

大場健太郎
東北大学加齢医学研究所 助教

生涯にわたる懐かしい記憶の価値と効果の探索――「記憶投資」に向けて

懐かしい記憶の回想には様々な心理効果があることが報告されているが、どのような懐かしい記憶がどのような効果をもたらすかという整理はこれまで行われてこなかった。心理社会的発達理論を考慮すると、ライフステージの各段階で懐かしい記憶の価値は異なり、異なる心理効果の発現に関与しているのではないか?という仮説が立てられる。本研究では、高齢者を対象とし、各ライフステージにおける1）懐かしい記憶を規定する価値概念を明らかにし、2）回想による心理効果の種類や程度が異なるかを検証し、3）懐かしい記憶の価値と心理効果の関係を機能的MRIを用いて検討することを目的とする。本研究を通して、ライフステージの各段階で、今の生き方が人生の後半で呈する意味を意識しながら人生をデザインする、“記憶投資”という新たな生涯観の提案に挑戦する。



A04-L102

原田悦子
筑波大学人間系 教授

高齢者の会話機能――会話能力のレジリエント特性からの層別要因分析

これまで認知的加齢研究では言語機能は健康な加齢による機能低下があまり見られない領域とされてきた。しかし実生活において高齢者との対話は若年成人同士との対話と比べて「時間や手間がかかる」ために「面倒」と回避される傾向があり、一方でうまく意思疎通できない場合には、その原因は個々の高齢者の人格特性や（疾病としての）認知症等へ帰属されがちである。現実の活動での健康な高齢者の会話は本当に加齢に対して頑健なのか、個々の基本言語要素ではなく、それらを統合的に扱う高次機能レベルでの会話に加齢変化はないのか、それが本研究で扱う問いである。

本研究では、本来、人が持つ会話機能が「外的攪乱要因に対して柔軟な対応を取ることによって、目的とされている実現すべき機能を維持し続ける」レジリエンス特性（Hollnagel, 2010）が高いことに注目、高齢者は加齢変化に伴う様々な要因に対してレジリエントなシステムの反応として「若年成人とは異なる言語活動」を行うとの仮説に立つ。特に加齢変化により高齢者に共通に現れる外乱要因として「認知・知覚・運動機能の低下」「感情・動機づけ側面の変化」「聴き手側の反応」の3層の要因をとりあげ、健康な高齢者により産出された会話データの分析を通してこの仮説の検証を行い、さらに高齢者および（高齢者との会話を行う）若年成人を対象とした、会話ガイドラインの提案可能性についても検討したい。

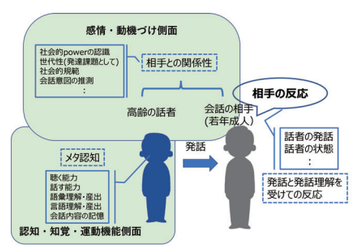


図1 高齢者の会話における加齢変化をとらえるための
レジリエンス特性モデル

A04-L103

川崎真弘

筑波大学システム情報系 准教授

生涯において他者とのリズム運動同期が認知機能と社会性に与える効果検証

ヒトは、社会（他者）とコミュニケーションする能力を維持・向上することで、脳の老化を防ぎ、認知機能や運動機能を向上させ、免疫系を高めることが可能である。このコミュニケーションには、うなずきやジェスチャーなどのリズム運動が含まれており、これらはヒト同士の間で同期し、生涯を通じてコミュニケーションにポジティブな影響を示す。しかし、これらのリズム運動同期がコミュニケーションに重要な認知機能や社会性の発達や維持にどのように遷移的に影響するかについて、行動成績および脳活動として定量的な評価と介入が完成できていないのが現状である。本研究は、若年層と高齢層を対象に、①リズム運動前後における認知機能と社会性の変化を行動成績と脳波から比較することで、リズム運動同期の生涯学における意義を確立することを目的とする。次に、②このリズム運動同期の成績を維持・向上できる訓練方法を確立することを目的とする。

A04-L104

鈴木敦命

東京大学人文社会系研究科 准教授

直感的信頼の成人期発達――課題有意義性と印象操作の影響を考慮した三世代間横断研究

本研究は、他者が信頼できるか否かの直感的判断（直感的信頼）について、高齢者が他の成人世代に比べて優れているのか、或いは特有のバイアスを持つのかを問うものである。人間には他者の信頼性を顔や声などの知覚的手がかりから直感的に判断する傾向がある。こうした直感的信頼の妥当性（信頼できそうだと直感した他者が実際に信頼に足る人物である蓋然性）について、現状では、全くないという主張と限定的だが存在するという主張が対立している。ただし、先行研究の多くは若年者を対象としており、直感的信頼、特にその妥当性が成人期に変化する可能性は見過ごされてきた。一つの可能性として、豊富な社会的経験を通じた学習により、高齢者の直感的信頼はより若い世代に比べて妥当性が高いことが考えられるだろう（熟達化説）。逆に、脅威やリスクの処理に関わるとされる扁桃体や島皮質などの脳領域の構造的・機能的変化により、高齢者の直感的信頼には他者を信頼しすぎるポジティブなバイアスがある可能性も考え得る（ポジティブ化説）。そこで本研究では、顔に基づく直感的信頼を高齢者、中年者、若年者の三世代間で比較する実験を実施し、熟達化説とポジティブ化説の比較検証を行う。実験参加者は、数十枚の顔写真を1枚ずつ見て、各顔写真の人物が「協力的」であるか「利己的」であるかを直感で回答する顔信頼性判断課題に主に取り組む予定である。顔写真の人物らは、他者に協力するか他者を裏切るかの決定を繰り返す実験にかつて参加しており、その実験での振る舞いに応じて協力的人物と利己的人物に分類されている。つまり、本研究の顔信頼性判断課題における協力的／利己的人物の区別は各人物の実際の行動傾向に準拠するため、判断の正確性（妥当性）とバイアスの推定に利用できる。加えて、本研究では、参加者が顔信頼性判断課題を有意義なものだと感じる程度や顔写真の表情（笑顔）による印象操作も要因に含め、これら状況要因が直感的信頼に与える影響も調べる。高齢者が直感的信頼に優れる可能性や、直感的信頼の世代間差の状況依存性を探ることは、「『成長から衰退へ』という固定的で単純な加齢観の刷新」に貢献すると期待される。なお、本研究は、専修大学教授の大久保街亜氏と同助教の石川健太氏を研究協力者として、実験計画への助言などの支援を頂きながら遂行する。

A04-L105

小池進介

東京大学心の多様性と適応の連携研究機構 准教授

脳画像による発達・加齢の個人差の同定と、生物・心理・社会的要因との因果関係の解明

磁気共鳴画像（MRI）を用いた脳画像解析が一般的となったが、縦断コホートがほとんどなく、ライフステージによって異なる影響を無視していた。その原因として、MRI機種間差の補正が困難であったため、脳発達・加齢変化をMRIでみることは限定的であった事が挙げられる。小池らはAMED国際脳プロジェクトにおいて、これらの限界点を解決する道筋をつけ、本研究ではこれまでの多施設共同研究による10-80歳、健常者2,000名（のべ3,000計測）、加えて精神疾患群1,000名以上の脳構造・機能特徴を高精度に結合し、発達・加齢曲線をライフコースにわたって推定する。これを用い、脳構造・機能の個人差を同定し、様々な生物・心理・社会的要因との相関関係を明らかにする。そのうえで、思春期400名、壮年期・中年期200名の、5年以上の計測間隔をあけたMRI縦断データを得て、個人差の変化と様々な要因との因果関係・階層性を明らかにする。本研究では特に、「脳構造・機能特徴が大きければ、実社会での機能・予後が良いのか？」に着目する。近年の思春期発達研究の成果により、ほとんどの脳構造特徴（脳体積、表面積、皮質厚）は思春期に減少し、これまでの多くの臨床研究成果である「精神疾患では脳体積の減少が認められる」との整合性が取れていない。これは認知症研究にも当てはまり、正常加齢の中で脳体積が減少していく中で、認知症の脳特徴が出現してくれば認知症発症のリスクとなるか、という問題は解けていない。この問題の一部は「大きいことは良いこと」を示す固定的な発達・加齢観では解けない可能性があり、非線形解析から抽出された「標準からの逸脱」をライフステージごとに検討する必要がある。本研究により、脳発達・加齢を適切に表現でき、この成果を基盤とした様々な応用を期待している。

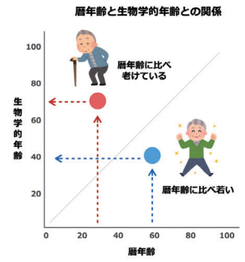
A04-L106

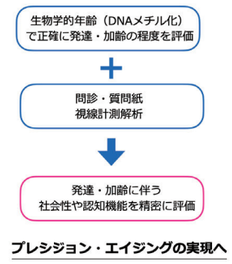
木村 亮

京都大学医学研究科 講師

プレシジョン・エイジングの実現を目指す神経発達症の発達・加齢研究

これまで、人間の生涯における個体の変化は、誕生からの時間で定められた「暦年齢」をもとに成長から衰退という現象を捉えてきた。しかし発達・加齢プロセスは、遺伝・環境要因の相互作用の影響を受けるため、個人差が大きく、「暦年齢」だけでは説明が困難である。とくに神経発達症では、症状の個人差や小児から成人への移行医療の難しさから、発達・加齢に伴って社会性や認知機能がどのように変化するのか、十分に明らかになっていない。本研究では、自閉スペクトラム症やそれとは逆の高い社交性を呈するウィリアムズ症候群を対象とし、組織・細胞の老化の程度を反映すると考えられている、DNAメチル化を基にした「生物学的年齢」を算出する。さらに問診や質問紙、ウェアラブルアイトラッカーを用いた視線計測解析を実施し、発達・加齢と社会認知機能との関係を明らかにする。このことにより、神経発達症だけでなく、広く老化プロセスへの介入・支援への応用に寄与することをめざす。





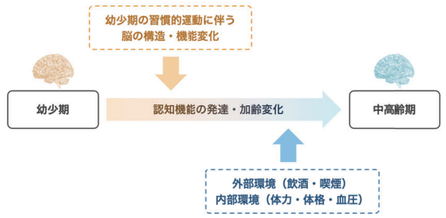
A04-L107

石原 暢

神戸大学人間発達学研究科 助教

幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明

幼少期の習慣的運動は認知機能の発達を促し、その効果は中高齢期まで持続することが示唆されている。しかし、その基盤となる神経機構と個人差は検討されておらず、どのような場合に幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能の維持・増進に貢献するのかは不明である。本研究では、幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能を維持・増進させる背景にある脳の構造・機能変化と個人差を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、子どもを対象とした前向き研究と中高齢者を対象とした後ろ向き研究を行う。子どもを対象とした前向き研究では、習慣的運動が認知機能の発達を促す背景にある脳の構造・機能変化を調べる。中高齢者を対象とした後向き研究では、幼少期の運動経験と認知機能が関わる背景にある脳の構造・機能的特徴を調べる。これらの結果を統合することで、幼少期の運動によってどのような脳の変化がもたらされた場合に、中高齢期の認知機能が維持・増進されるのかを明らかにする。加えて、中高齢者を対象とした後向き研究では、上記の研究で明らかになった脳の変化がどのような外部環境（生活習慣：飲酒、喫煙など）と内部環境（身体状態：体力、体格、血圧など）の中で長期にわたって維持されるのかを調べる。これらの成果により、幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能を維持・増進させる条件の解明に迫る。



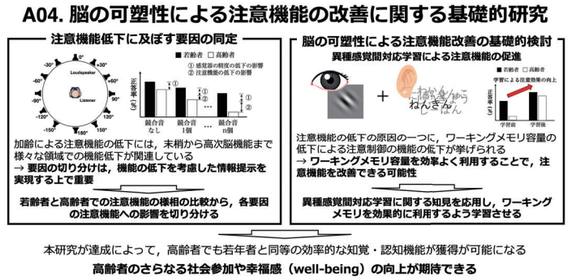
A04-L108

寺岡 諒

熊本大学人文社会科学研究部 研究員

脳の可塑性による注意機能の改善に関する基礎的研究

ヒトは、様々な物体や事象から発せられた、膨大な感覚情報に常にさらされている。これらの情報すべてを脳が一様に処理するのは難しいため、注意による情報の取捨選択を行い、必要な情報を選択的に処理している。特に聴覚は、常に全周囲の情報を取得・処理していることから、注意が及ぼす影響は大きい。一般的には、注意機能は加齢によって特性が変化し、徐々にその精度が低下する。この機能は、日常でのコミュニケーションや周辺環境の把握のみならず、自動車の誤操作や振り込め詐欺といった高齢化による社会問題の一部とも密接に関与していることから、注意機能低下に対する対応策の確立は喫緊の課題である。本研究では、特に聴覚情報処理に関与する注意機能（聴覚的注意）に焦点を当て、若齢者と高齢者の注意機能の様相の比較から、加齢によってどのように注意機能が変容するかを解明する。さらに、脳の可塑性に着目し、加齢による注意機能の低下を補償させる手法の確立をめざす。本研究の成果を通して、若齢者と同等の効率的な知覚・認知精度の獲得のみならず、高齢者のさらなる社会参加やwell-being（幸福感）の向上などが期待される。



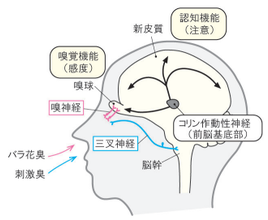
A04-L109

内田さえ

東京都健康長寿医療センター研究所
自律神経機能研究室 専門副部長

嗅神経・三叉神経を介する嗅覚の感度と認知機能の相関性の解析

嗅覚機能は認知症の最も初期から顕著に低下する。本研究は、神経生理学的知見に基づき、嗅神経と三叉神経の神経経路の異なる匂いに着目し、嗅覚と認知機能の関連性を解明することを目的とする。様々な世代を対象に調査し、特に高齢者における特徴を明らかにする。芳香の認知に関わる嗅神経–嗅球系を介する匂い（バラ花香など）と、生命の危険を察知する三叉神経–脳幹系を介する刺激臭（酢など）では、認知機能との関連が異なることが予想される。認知機能としては認知症で脱落する前脳基底部コリン作動神経が担う注意や弁別機能との関連が予想される。更に、生理的反応の指標として嗅覚や認知課題遂行時の脳血流反応を調査し、嗅覚機能との関連性についても解析する。 具体的には以下の2項目を解明する。①嗅神経・三叉神経を介する嗅覚感度と認知機能の相関性。②嗅神経・三叉神経を介する嗅覚感度と脳血流反応の相関性。 本課題研究は超高齢社会において、神経機構に基づく新しい嗅覚・認知機能研究の提案、高齢者の認知機能低下を早期に発見・予防する嗅覚刺激法の開発、の点で「生涯学」研究領域の推進に貢献することをめざす。



A04-L110

西田裕紀子

国立長寿医療研究センター
老化疫学研究部 副部長

脳局所容積の加齢変化と認知機能、幸福感の経時的相互関係――10 年の長期縦断疫学研究

世界的に高齢化が進み、エイジングに対する理解が不可欠となっている。神経系の中枢である脳は、加齢に伴いどのように変化し、こころの機能と関連するのか。本研究では、地域住民から性・年齢層化無作為抽出された中高年者の脳の形態的側面に着目し、脳局所容積の10年間の加齢変化を明らかにするとともに、認知機能、幸福感との経時的な相互関係を明らかにする。対象は「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究（NILS-LSA）」に参加する中高年者約2200名（40～89歳）で、頭部MRI3次元画像、認知機能、幸福感の変数を収集した第6次調査（2008-2010年）、第7次調査（2010-2012年）、第9次調査（2018-2022年度終了見込み）の3時点、約10年間の縦断的検証を行う。当領域研究に貢献し得る点は以下のとおりである。第一に、NILS-LSAは地域住民の加齢を観察することを目的とした学際的縦断研究であり、脳加齢を含め、加齢に伴い衰退する側面、成熟する側面の双方から生涯発達過程を検討することができる。第二に、当領域研究では既に、脳加齢の機能的側面に関する研究が精力的に進められており、そこから明らかとなる「脳の機能上の可塑性」と、本研究が明らかにする「脳の形態上の可変性」（共に個人と環境の相互作用の中から生じる）を「生涯学」の枠組みの中で議論、統合することにより、脳の加齢を包括的に理解し、新しい生涯発達的視座を見出すことをめざす。

図1　国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究
National Institute for Longevity Sciences - Longitudinal Study of Aging : NILS-LSA

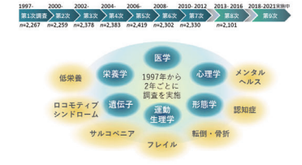
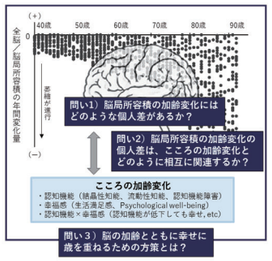


図2　本研究の枠組み



B03　社会的環境とその中に置かれた個人の生活に関する社会学的研究

B03-L101

安元佐織

大阪大学人間科学研究科 講師

夫婦・親子交流に基づく「高齢期の社会化」に関する研究

本研究では、本領域「生涯学の創出」がめざす「社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセスを明示する」ことに向けて、サクセスフルエイジングに影響すると言われる「高齢者イメージ」や「高齢者ステレオタイプ」が、どのようなプロセスを経て作りかえられていくのかを、家族という最小単位の社会に注目して捉えることを目的とする。これまで、サクセスフルエイジングは「個人が達成するもの」と考えられてきた。しかし、日本や東アジア諸国の高齢者のサクセスフルエイジングを理解するには、親密な関係にある他者の重要性が明らかになっており（Levy 1999; Levy, Ashman and Slade 2009）、これまで注目されてこなかった「関係性を通して成長と変容を繰り返す高齢者としての自己概念や社会的役割が、サクセスフルエイジングに影響する」という視点を考慮することで、これまで西洋文化を主流にしたサクセスフルエイジングのモデルにアジア文化的な視点を提示することが可能となる。また、「人生100年時代」と呼ばれる日本では、高齢者を取り巻く環境が多様になり、夫婦や親子という関係性を持たない高齢者も増加している。しかし、そのような親密な他者との交流がない高齢者の老いの過程についての知見は限られている。また、今まで高齢者にとっての親密な関係にある他者は、「介護研究」の領域で問われることが多く、介護を必要としない高齢の夫婦や親子という関係が、個人のウェルビーイングにどのような影響を与えるかは明らかでない。このような課題を考慮し、本研究では①中年期・高齢期の夫婦、②未婚、離婚、死別などにより配偶者がいない中年者・高齢者、③高齢の親と中年・高齢の子ども、④ロールモデルとなる高齢の親がいない中年者・高齢者を対象に、親密な関係にある他者との交流によって構築される「高齢者イメージ」や「高齢者ステレオタイプ」を理解し、それらが高齢者としての自己概念の形成や社会的役割の獲得に影響する過程を検討するための、質問紙調査とインタビュー調査を行う。それによって、生涯発達における processes of socialization to old age（高齢期の社会化プロセス）を説明する理論構築を行うと同時に高齢者にとって効率的な私的・公的サポートシステムや社会活動促進案に関する示唆を得ることをめざす。

B03-L102

笠井賢紀

慶應義塾大学法学部 准教授

縮小・高齢社会のレジリエンスに貢献する高齢者の生活経験の質的研究

今後の日本社会は縮小・高齢社会を前提にする必要がある。縮小・高齢社会においても、地方の地域社会は一定のレジリエンスを有している。ここで、地方の高齢者を支えられる客体として分析するだけでは不十分であり、むしろ共生社会の主体的担い手と考えることが重要である。現在70歳代前半の高齢者はその人生においてライフスタイルの社会的変容を経験し、その中で地域社会と生活との関わりの変化も大きかった。本研究では同世代を主な対象として口述史の聞き取りを行うと同時に、同世代の生きてきた社会について明らかにするために民俗・地域行事や、自治会報などの地域資料を分析すると質的混合調査法を取る。

対象とするのは滋賀県内の伝統的集落とニュータウンの2地域である。それぞれ歴史的背景は異なるものの、共生社会としての地域社会を成立させるためのレパートリーを現在の高齢者たちが経験してきたと考えられ、そのレパートリーを描くことを通じて高齢者の経験を将来社会へと活かすための方法構築をめざす。本研究では、高齢者の生活経験を分析するにあたり、口述史の聞き取りを主たる方法として採用するが、その際、住居史にも着目する。住居は生活の空間的な最小単位であるとともに、地域社会と家族との関わりの変化を観察するのに重要なためである。これは、個人史が個人や家族だけに閉じられた物語として展開されることを避け、地域社会との関わりを明示的に取材するための調査上の工夫である。これに加え、対象となる高齢者たちがどのような社会に生きてきたか、社会史の側面からアプローチすることが必要である。本研究では社会史を明らかにするために、1）子どもが担い手の民俗行事・地域行事、2）地域内限定で刊行・配付されていた地域資料について、それぞれ対象者の経験と重なる半世紀ほどの射程で収集・分析する。

本研究では以上のような混合調査法を用いることで、①対象高齢者のこれまでの生活はどのようなものであったか、②地域社会と生活との関わりはどう変化してきたか、③そうした生活・変化は地域社会の特性にどれだけ影響を受けるかを分析できるようになると期待できる。

E01 A01 A02 A03 B01 B02 C01 C02 D01 の境界領域に関する研究

E01-L101

小笠原知子

金沢大学国際基幹教育院 助教

認知症家族が体験する「あいまいな喪失」についての研究

「喪失」は人が生きて行く上で避けることのできない体験であり、高齢化する現代社会において、身体や認知機能のみならず、親密な関係性の喪失は、当人および近親者の心の健康や生活の質に大きな影響を及ぼす。近年、「あいまいな喪失（Ambiguous loss）」（Boss, 1999）として理論化された「喪失」は、「はっきりしないまま、解決することも終結することもできない喪失」という特徴から、自然な「悲嘆」のプロセスが遮断され、精神疾患の引き金ともなることが明らかになっている。本研究では、認知症患者の家族介護者が体験する「あいまいな喪失（Ambiguous Loss；以下、AL）の実態を捉え、それが介護者に与える心理社会的健康度を分析する。当事者の語りと自己評価による指標を用い、不確実な状況にあってもより良く生きるための「関係性の資源」を検討し、患者家族への支援へつなげることを本研究の目的とする。また、以下のように本研究の計画を実施する。

1）事前研究：「AL尺度」の検証
認知症の診断を受けた患者の介護家族を10家族程度募集し、主研究者が作成した「AL尺度」を実施する。中核質問を含む「AL尺度」作成により、「体験」の差別化と数値化を行う。

2）「心理社会的健康度尺度」と「AL尺度」の実施
認知症の家族会を通して200〜300人の参加家族を募集し、①「AL尺度」、②「心理社会的健康度」尺度からなる質問票調査を実施し、介護家族の「健康度」を調査する。

3）「介護とAL」インタビュー調査
同意の得られた参加者に対して、その介護体験とALについて質問し、その語りを記録する。その際、ALへの向き合い方の「質的な違い」に焦点を当てながら聞き取る。

4）質的データ分析と類型化による検証
文字化された質的データは、主研究者と研究協力者による内容分析→対処別3つの類型化→質的分析ソフトを用いた検証、という4つのステップで行い、仮説的に設定したALへの対処志向：① 肯定的対処型（矛盾を受け入れながらも進む）、② 葛藤型（拒絶や凍結を抱える）、③ 回避型（問題化しない）への類型化を検証する。また、それぞれの類型と心理社会的健康度の相関を探索すると共に、項目分析では捉えきれないAL体験の縦断的変化や体験の意味づけ等を明らかにし、「ALと共によりよく生きる関係性とそうでない関係性にはどのような違いがあるのか」という問いを検討する。

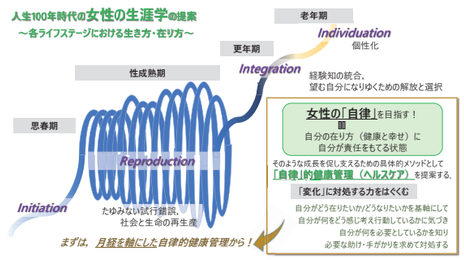
E01-L102

江川美保

京都大学医学研究科 助教

性周期を軸にした「女性の生涯学」の提案と社会参加への応用

子どもを産み育てる生殖機能を有する女性では生涯にわたり女性ホルモンの血中濃度もダイナミックに変動し、それは女性の心身両面の健康に大きな影響を与える。そのような女性たちがウェルネスを保ちつつ心地よく社会参加し続けられるような世の中を作るためには、女性特有の生殖生理の理解と生物学的根拠に基づいた「生き方の指針」が求められる。本研究では社会の再生産を担う性成熟期において女性のメンタルヘルスに大きな影響を与える月経前症候群（PMS）に着目し、その適切な医学的評価に不可欠である症状記録法としてわれわれが開発したスマホアプリを用いて「セルフモニタリング」が自己効力感の向上などに寄与するか否かを検証すると同時に、包括的月経教育プログラムも開発する。症状が多彩でとらえがたいPMSの客観的指標を探索するためにfMRIを用いた脳科学的解析や自律神経測定も行う。このように「自覚するコンディションの記録」と「生体指標の取得」という2つのアプローチによる「PMSの可視化」を試みることを通して女性の自律的健康管理法を提案し、変化に富む女性の全ライフステージを貫く「自律的生き方」への展望を開く。

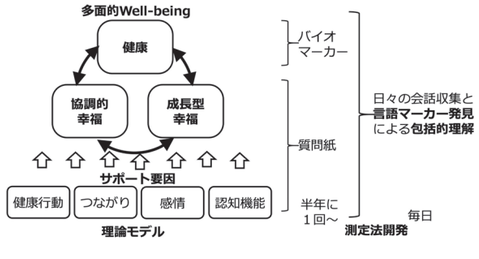


E01-L103

中山真孝
京都大学こころの未来研究センター 助教

高齢者の多面的 Well-being――言語マーカー・主観指標・バイオマーカーから

本研究では、高齢者のWell-beingの多面的概念化と多面的測定を行うことをめざす。核概念として高齢者にとって重要である健康と、健康面など様々な限界がありつつも幸せであるという状態や考え方として協調的幸福を含めた多面的概念化を行う。さらに、個人やその内的状態としての健康や幸福感だけでなく、個人の習慣、取り巻く人々や環境を含めて暮らし全体の中で包括的・多面的にWell-beingを捉える方法の開発を目的とする。特に、AIスピーカーを用いて日々の会話を記録し、それを各種バイオマーカーと質問紙指標と対応づけることで、多面的Well-beingの言語マーカーの発見をめざす。特に言語データは、単語レベルの分析、感情状態の分析、トピックモデルによる分析を中心とし、各個人の平均的状態だけでなく時系列変動も分析する。また、分析観点として、運動習慣、健康行動などの生活習慣や人間関係や地域活動といったつながりに関することを含み、それらの関係を含めて多角的に検討する。これらにより、日々の暮らしを細やかに把握する。さらに、言語データ、バイマーカー、主観指標のそれぞれがどのように関連するかを明らかにすることで、健康・協調的幸福・成長型幸福の多面的Well-beingを示す言語マーカーの発見をめざす。紐付け分析においては、先行研究のデータや理論から予測される関係の検討だけでなく、データ駆動型の機械学習を用いることで、先行研究よりも高い粒度を持つ本研究で初めて明らかになることの発見もめざす。

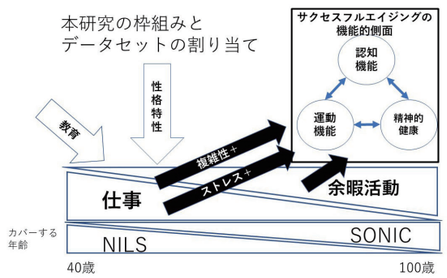


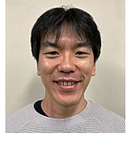
E01-L104

権藤恭之
大阪大学人間科学研究科 教授

中年期から高齢期の生活文脈が認知機能、運動機能、精神的健康に与える影響の検証

本研究の目的は、①中年期から高齢期にかけての生活文脈が、高齢期から超高齢期にかけての機能的側面におけるサクセスフルエイジングに与える影響を検証することである。日本を代表する2つの大規模な学際的縦断研究であるSONIC（大阪大学・東京都健康長寿医療センター研究所、慶應義塾大学）と、NILS-LSA（国立長寿医療研究センター）が有する既存データをハーモナイズして統合することにより、これまで実証不可能であった40歳から100歳までの幅広い年代の長期的変化と年齢区分ごとの影響を検討することが可能となる。その結果、②生活文脈が影響する年齢の上限、および効果の持続期間を明らかにすることをめざす。本研究では、生活文脈として、仕事、家事、余暇活動に注目し、それらがサクセスフルエイジングを構成する、認知機能、身体機能、精神的健康に及ぼす単独の影響および相互の影響を考慮した統合的な影響を検証する。さらに、③生活文脈に影響する個人の要因として性格特性を考慮し、より応用可能な知見を提供することをめざす。





E01-L105

進矢正宏
広島大学総合科学研究科 准教授

「やりたいことができる」の基盤となる運動制御能力 ―― 予測的姿勢制御学習の生涯学

「行きたいところに行ける・やりたいことができる」という随意運動制御と、それを支える予測的姿勢制御は、幼児から高齢者まで、生涯に渡って人間の幸福の基盤となる神経系の機能である。たとえば、発達性協調運動障害（DCD）児や転倒経験高齢者では、典型発達の幼児や健常高齢者と比較して、さまざまな全身運動を行う際に、姿勢が不安定となることが報告されている。随意運動を行う際の姿勢の安定性は、どのような運動を行うかという計画に基づいて、予測的に姿勢制御（Anticipatory Postural Adjustment: APA）を行うことによって確保されている。健常若年成人は、新規な環境における適切なAPAを、わずか1回〜数回の試行を通じて素早く獲得できるという、驚くべき学習・適応機能を持っている。一方で、このようなAPAの学習機能が、発達の過程でどのように獲得され、加齢に伴いどのように変容していくのか、という点は未解明であり、本研究は、APAの生涯に渡る変化を明らかにすることを目的とする。

APAの学習・適応能力を定量的に計測するために、言語理解を必要としない直感的な姿勢制御課題として、引き出しを引く動作をモデル課題として開発する。引き出しの背面に電磁石を設置して、引き出しを開けるために必要な力を自在に設定できるようにする。被験者が引き出しを引く力、床反力や足圧中心、三次元動作データ、表面筋電図を計測し、APAのパラメータや姿勢動揺の変化を定量的に解析する。

上記の研究計画の他、「生涯学」に参画する研究者の皆様との議論や共同研究を積極的に行いたい。たとえば、感覚・記憶・認知といった要素の変容が、高齢者の社会参加やウェルビーイングに影響を与える過程には、自動車の運転や入浴が困難になるといった、日常的な運動課題遂行の問題が介在している可能性がある。マーカーレスモーションキャプチャー技術や動作解析技術を活かして、このような行動の計測や定量に貢献できる可能性があり、「生涯学」の推進に参画できることを楽しみにしている。

E01-L106

江口洋子
慶應義塾大学医学部 訪問研究員

百寿者に学ぶ、年齢に相応しい自立の在り方に関する研究

加齢や認知症で影響を受けやすい認知機能が記憶であることはよく知られている。しかし記憶の低下があっても、地域では超高齢者（85歳以上の高齢者を指す）が比較的自立して自宅で生活している。高齢期に自立した生活をするために必要な認知機能を明らかにし、それを継続させるための手法や支援を考えることは、少子高齢社会において限りある人的資源を最大限生かすために重要である。本研究では超高齢者が、生命を脅かす危険な事故（例えば出火や繰り返しの転倒など）を生じない範囲で、自宅で暮らすために必須の認知機能とその程度を明らかにする。さらに比較的自立した百寿者（100歳以上の高齢者を指す）と対比させながら、超高齢者が百寿になるまで暮らし慣れた自宅で生活するための認知機能低下に対するピンポイントの支援や生活継続のための必要最低限のインフォーマルケア（家族や友人、地域住民、ボランティアなどによる、公的制度に基づかない支援）は何かを明らかにする。

高齢者における「比較的自立した生活」について定義を試み、百寿の在宅生活者をモデルとして参考にし、在宅生活する長寿の人物像を示すことにより、老いは喪失の過程であるというこれまでの一般の悲観的な見方を改め、「このように生を全うしたい」という新たな超高齢者観を創出する。

E01-L107

松田英子
東洋大学社会学部 教授

睡眠中の夢の解析によるライフキャリア形成支援に関する心理学的研究

人生100年時代を生きる変幻自在なキャリア(protean career)の形成支援を行う心理学的研究として、本研究は10代から90代の人々の睡眠中の夢の報告とそれに基づく人生の語りを対象に、次の研究目標に基づき実施する。具体的には、夢の報告者の生涯発達を中心に、その他の属性、パーソナリティ特性、精神症状の有無や種類によって分類し、ある程度標準化することが可能な日本の夢のデータベースを作ること、夢を報告者のパーソナリティ特性とライフイベントの観点(素因-ストレスモル)から捉える資料として、本人の自己理解を深化させるための資料として活用すること、ライフキャリアカウンセリングにおいて夢資料を活用し、イメージを利用した認知行動療法の技法を適用することで、より精神的な健康を高める予防法を提案すること、キャリアインタビューの中で報告された夢資料に悪夢があった場合、およびその悪夢の内容を認知機能障害の観点から捉え、必要に応じて心理支援や医療につなげることを目的とする。

まず本年度は、小学生から高齢者までの夢とその他の属性やパーソナリティ特性に関わるデータベースを作成する。データベースは、これまでに収集した研究代表者および研究協力者のこれまでに取得したデータ、その他必要なデータがあれば新たに収集し分析することで、夢の発達的変化に関わる各種データを分析可能にする。また、高齢者の高夢想起者や明晰夢者を対象にした面接調査および、イメージを利用した認知行動療法の技法(イメージエクスポージャー、イメージリハーサルセラピー、および明晰夢)の効果を睡眠実験で確認する。次年度は、これらを発展・継続させ、日本版ドリームサイト公開の準備をすすめることと、夢資料を利用したキャリアカウンセリングを実施し、精神的な健康を高める予防法として手続きの公式化を行う。

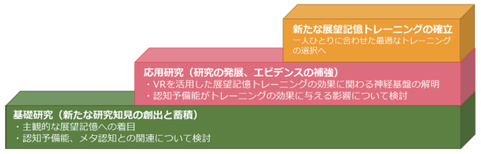
超高齢社会にある日本の夢研究から、①夢資料から見る生涯発達的変化、②夢資料に基づく認知機能のアセスメントとメンタルヘルスの予防、③夢イメージを利用した今後のライフキャリアの形成支援、つまりは現実生活における夢の実現に関する知見を発信することで、睡眠中の思考という側面から新しい生涯発達観を支えることができるのではないかと考える。

E01-L109

三浦佳代子
長崎純心大学人文学部 講師

展望記憶における認知予備能の役割理解と応用

日常生活における忘却の多くは展望記憶の失敗によるものであり、高齢者を対象とした記憶愁訴の実態に関する研究では、全体の約4分の1が展望記憶に由来する愁訴であったという報告がある。展望記憶は、日常生活機能の中でも特に金銭管理や服薬管理、買い物、食事の準備といった手段的日常生活動作(IADL)に影響する重要な認知機能である。しかし、展望記憶に関する研究は回想記憶に比べ少なく、十分な知見が蓄積されていない。本研究では、日常生活機能と密接に結びつく展望記憶に着目し、展望記憶の自己認識に及ぼす加齢の影響と展望記憶における認知予備能の役割を明らかにする。また、現在開発中のVirtual Realityを活用した展望記憶トレーニングシステムを用いた介入を行い、トレーニングの効果に関わる神経基盤、そして認知予備能がトレーニングの効果に与える影響について検討する。展望記憶機能の維持要因やトレーニング効果に影響を与える要因として認知予備能に着目することで、一人ひとりに合わせた最適な認知トレーニングを選択するための新たな視座を提示することをめざす。



E01-L110

三浦貴大
産業技術総合研究所
人間拡張研究センター 主任研究員

視覚・聴覚障害者のライフヒストリーに基づくレジリエンス向上のための生涯学習方法論

日本国内において、視覚障害者・聴覚障害者の半数以上は高齢期にある。彼らの感覚体験や生活訓練状況は多岐に渡るため、共通した支援策や生涯学習スキームなどを打ち出しにくい。一方で、障害状況における生涯での対処経験やニーズなどを解明できれば、高齢期になって受障した人の自立支援策などを詳細化でき超多様性社会の進展に繋がる。そこで、本研究の目的を、先天性・後天性の視覚障害・聴覚障害のある高齢者のライフヒストリーを基に、レジリエンスを維持・向上させた要因を解明し、その時点のニーズなどを踏まえた生涯学習スキームの構築とする。実施課題は次の通りである。

1)先天・後天性の視覚障害者・聴覚障害者へのライフヒストリー調査：視覚障害、聴覚障害のある高齢者に対して、発症時期別に半構造化インタビュー調査を行い、障害発症後に受けた教育・訓練で習得したスキルの他、役に立った/立たなかった場面について聴取する。また、対処の際や高齢期である現状において、必要だったと思われるスキルなどについて聴取する。

2)1)の結果に基づくレジリエンス性を維持・向上させた要因に関する分析：各人に焦点を当てた現象学的な経験に関して、1)で得られたテキストを基に分析する。特に、障害状況・障害発症時期・若年期/高齢期でのニーズや対処方法について各人の状況を概説し、テキストに各種コーディングを施す。さらに、コーディング結果を基に、視覚障害・聴覚障害状況にある中での対処法について取りまとめる。また、レジリエンス性を高める要素や学習・訓練方法に関する理論構築を試み、生涯学習スキームに組み込む内容を整理する。

3)先天・後天性の視覚障害者への社会復帰や学び直しニーズに関する大規模アンケート調査：2)の結果が多くの視覚障害・聴覚障害の方に当てはまり得るのかを検討するとともに、漏れがあった事例も収集するため、アンケート調査を行う。特に、2)の段階で未確認だった例を列挙し、レジリエンス性を維持・向上させた要因、さらにフォーマル・インフォーマルな学習・訓練方法について再分析する。

4)生涯学習スキームの提案とその継続的実施・効果検証：2)および3)の調査結果を踏まえ、生涯学習スキームを提案の上で、視覚障害・聴覚障害のある社会人・高齢者を主たる対象者とした生涯学習講座の開催を試みる。講座は、対面・遠隔の双方を想定する。

2021年6月～8月 福島県・山形県・宮城県

D01 東北大学社会教育主事講習への「生涯学」の導入

報告：石井山竜平（D01社会教育班 研究代表者／東北大学）

「社会教育主事講習」とは

「社会教育主事」とは、都道府県・市町村の教育委員会に置かれる専門的職員で、社会教育を行う者に専門的技術的な助言等を行う教育専門職です。この職務を担当する資格は大学で取得できますが、現職の公務員・教員の人事で、大学で未取得の者等に対する措置として、そうした社会人向けの講習として社会教育主事講習が、全国十数か所で開催され、定着してきています。福島、山形、宮城の南東北エリアについては、東北大学が毎年、この講習を6月下旬から8月上旬にかけて実施しており、本年は計74名の教職員、公務員等が受講し、資格を取得しました。現職の教職員や公務員が受講できる研修・講習としては、破格に長期で職場を離れて学習に専念する内容です。その分、この講習の枠組みを守ることをめぐっては、年々厳しさを増しながらも、何とか規模縮小を押しとどめつつ実施しているところです。

社会教育主事は従来、各都道府県・市町村でその職名が発令されないと名乗れない、いわゆる「任用資格」で、いわば公務員のなかだけで意味を持つ資格でした。それが2020年度より、資格要件単位を修得すれば、世間で「社会教育士」という称号を名乗れるかたちに改正がされました。今後この講習の受講者が、公務員に限定されない世界で活躍されることを企図された制度改革です。

「生涯学」と社会教育との出会いへの期待

この講習に2021年度より、新規科目として「生涯学」から、認知心理学（講師：月浦崇・朴白順）、社会学（講師：柴田悠・筒井淳也）、文化人類学（講師：金子守恵・倉田誠）の三つの講義を組み込みました。

この講習計画の審査において文科省からは、『「生涯学」による人間の一生涯の捉えなおしや、東日本大震災を経てリスクの高まりを未然に気づき、連帯しながら乗り越えていく、という観点からの社会教育の位置づけなおしに、積極的に取り組んでいることは評価できる』と、前向きに受け止めていただけたことに、主任講師の立場としては安堵したところでした。

と言いますのも、この度の講習計画は社会教育士創設に伴う新制度での初回であり、従来より細かく講義内容が規定されるなか、これら新科目の内容は必ずしもその内容に合致しておりません。でありながら、本講習計画に生涯学を組み込んだのには、私自身の、これからの社会教育関係者への期待・強い思いがあります。

そもそも、私が社会教育学の道を志したのは、大学時代、当時出会った社会教育職員（自治体職員）たちが、日ごろは地域の方々とお茶を飲み、ときには共に汗をかきという、素朴な日常の人々でありながら、実はとても深く学問知を咀嚼してらっしゃったことに気づき、驚かされ、強い恥ずかしさを覚えたところに始まります。

彼・彼女らは、大学で学習に専念しているはずの私などよりも、よほど早く深く新文献を読みこみ、それを現実社会、生活世界をくぐらせて理解し、さらには、どの研究者が自分たちが学ぶに値する存在なのかを吟味していました。「どうすればこのような学問への審美眼を備えることができるのか」、その力に悔しさと憧れを感じたのが、私にとっては社会教育への入り口でした。

学問を「薬」に例えるなら、大学は「創薬」であり、社会教育は、地域に必要な薬はどれかを吟味して届ける、時には調剤を行う「薬剤師」的な役割なのかもしれません。私は社会教育の役割の一つに、そうした学問知を世間知につなげる翻訳力をみたのでした。その後、全国の社会教育関係者とつながるなか、「大学と社会教育」「学問と地域」との関係は、互いが砥石である関係のなかで、互いの発展が作られてきた領域が少なくないことも学んできました。

しかし今日、公務労働者はその多忙さのなかで、学問との接点を弱めていますし、研究が自らの次なる行動の羅針盤になるという確信を持つ機会に乏しいのが現状です。この私たちのささやかな取り組みが、そこをつなぐ一助となればと思います。もちろん、講習の一部に講義を組み込んだだけで、現場と学問の相互作用が簡単に生じるものではありません。しかし、これを糸口に、関心を示してくださった方を頼りにモデル自治体やモデルコミュニティを設定し、地域展開の具体を協議するチームを形成するなど、次なる仕掛けを次年度以降で講じていきたいと考えております。

受講生の感想（抜粋）

認知心理学からの学び

- このような研究課題がこれからの社会問題の中枢となるのではないかと思った。私も実際に家族の介護に携わった経験もあり、少しでも知識や理解があれば、関わり方も違ったのかもしれないと思いました。
- 生物学的要因として加齢による記憶の低下を他者とのつながりや関係性を深めることで、逆に促進されるであろうことは、なんとなく、そうではないかと思っていたが、データ的に確認できました。

社会学からの学び

- 「社会」を学ぶということは、そこで生きている人を学ぶということなんだと思いました。長期的・横断的なデータの例を見て、こういう手法でいろいろなことを明らかにしているのだということを学びました。
- 今、本講習で調査活動を行っていますが、問いや課題の設定、アンケートの項目（何を聞くか、どう聞くか）づくり、結果からの考察など、調査活動の難しさを感じています。今日お話を聞いて、調査の筋道が立っていると、聞いている人にとってもわかりやすいものになっていて、アンケート調査をするうえでも勉強になりました。また、様々な物事の相関関係を見て、想像を膨らませることが大切だと感じました。家庭環境と子どもの様子に関係があるかもという話題は教員間の話でもよく出ますが、実際に研究でデータがはっきりと出ていることが驚きでした。教員として、家庭環境に踏み込むことはできませんし、できることは限られていますが、ここでお聞きしたことを念頭に置いて、子どもと関わりたいです。

文化人類学からの学び

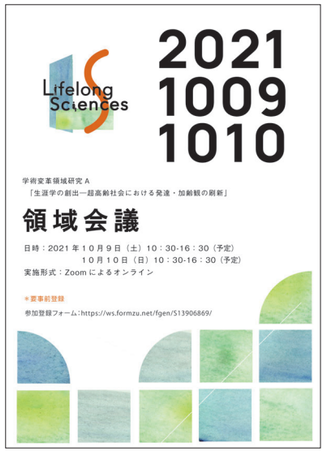
- 日本では「上の人が型にはめてしまう」「上から指示をする形」がほとんどであり、それでは子どもたちの才能を潰してしまうのだと思う。エチオピアの土器作りは母から娘に伝わるものであるが、母親が娘の手を尊重し、教え過ぎない・教えないという考え方も素晴らしい。どのような立場でも、尊重し合う姿が本来の学びの土台であると改めて振り返ることができた。他の国の考え方に学ぶ部分があり、今後の日本の教育のヒントになるものではないかと感じた。
- 年齢が上がるにつれて、優れた技術をもつようになると考えていたが、実際は違っており、研究することの大切さを感じた。倉田先生の「ごちゃ混ぜの空間」は違って当たり前の世界なので、今の学校の教室の考え方とは異なると感じ、必要なことだと感じた。

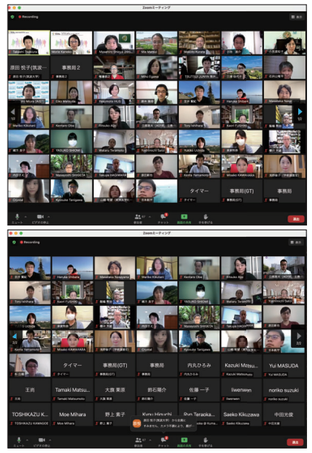
2021年10月9・10日 オンライン

領域全体

「生涯学」第2回（2021年度第1回）領域会議を開催

2021年10月9日（土）・10日（日）の2日間にわたり、科学研究費助成事業学術変革領域研究（A）（2020年度～2024年度）『生涯学の創出――超高齢社会における発達・加齢観の刷新』〔略称：「生涯学」第2回（2021年度第1回）領域会議〕をオンライン開催しました。両日とも70名を超える方にご参加いただきました。





プログラム概要

［1日目］ 10月9日（土）

10：30―10：45	領域代表挨拶 月浦 崇（京都大学）
座長：石井山竜平（東北大学）	
10：45―11：00	口頭発表1 安元佐織（大阪大学）
11：00―11：15	口頭発表2 笠井賢紀（慶應義塾大学）
11：15―11：30	口頭発表3 中山真孝（京都大学）
11：30―11：45	口頭発表4 権藤恭之（大阪大学）
11：45―12：00	口頭発表5 三浦貴大（産業技術総合研究所）
12：00―13：15	休憩
座長：松井三枝（金沢大学）	
13：15―13：30	口頭発表6 三浦佳代子（長崎純心大学）
13：30―13：45	口頭発表7 小笠原知子（金沢大学）
13：45―14：00	口頭発表8 江川美保（京都大学）
14：00―14：15	口頭発表9 松田英子（東洋大学）
14：15―14：30	口頭発表10 進矢正宏（広島大学）
14：30―15：00	休憩
座長：金子守恵（京都大学）	
15：00―16：30	領域内交流プログラム 方法論研修プログラム：実験研究・調査研究・フィールド研究の方法研修プログラム ――分野連携・融合への入口」
15：00―15：05	趣旨説明 日高聡太（立教大学）
15：05―15：20	日高聡太（立教大学）
15：20―15：35	筒井淳也（立命館大学）
15：35―15：50	フィールド研究 倉田 誠（東京医科大学）
15：50―16：10	全体討論 筒井淳也・倉田 誠・日高聡太
16：10―16：30	領域内共同研究プロジェクト制度のご案内

［2日目］ 10月10日（日）

座長：月浦 崇（京都大学）	
10：30―10：45	口頭発表11 原田悦子（筑波大学）
10：45―11：00	口頭発表12 江口洋子（慶應義塾大学）
11：00―11：15	口頭発表13 小池進介（東京大学）
11：15―11：30	口頭発表14 西田裕紀子（国立長寿医療研究センター）
11：30―11：45	口頭発表15 木村 亮（京都大学）
11：45―12：00	口頭発表16 大場健太郎（東北大学）
12：00―13：00	休憩
座長：寺本 渉（熊本大学）	
13：00―13：15	口頭発表17 川崎真弘（筑波大学）
13：15―13：30	口頭発表18 鈴木敦命（東京大学）
13：30―13：45	口頭発表19 石原 暢（神戸大学）
13：45―14：00	口頭発表20 寺岡 諒（熊本大学）
14：00―14：15	口頭発表21 内田さえ（健康長寿医療センター）
14：15―14：35	講評 領域内評価者： 佐藤嘉倫先生、佐藤一子先生、 櫻井芳雄先生 文部科学省学術調査官： 浅野倫子先生、中村沙絵先生
14：35―14：45	閉会挨拶 月浦 崇（京都大学）
14：45―15：00	休憩
15：00―16：30	総括班会議

参加者の感想

この度は、領域会議に参加させていただきありがとうございました。私は、数年前まで看護師をしており、現在は大学で精神保健看護学を専門とする教員として勤務しながら、松井三枝先生（A03臨床心理班 研究代表者）の研究室で大学院生として研究活動に取り組んでいます。今回は、公募研究班の代表者が研究概要を発表するため、分野が多岐にわたり、私に理解できるか不安でしたが、非常に明解な説明ばかりで自身の研究とも関連づけて拝聴することができました。

とくに興味を惹いたのは、Virtual Realityを活用した展望記憶トレーニングシステムを用いた研究です。認知機能改善療法に関する研究をしている私にとって非常に勉強になりました。現実世界に近いトレーニングに関する研究は、障がいがある当事者にとって有益な研究に繋がりそうだと感じました。また、症状記録ができるスマホアプリは、私が取り組んでいる研究でも活用できそうだと感じ、開発方法についてお話を聴くことができれば、新たな可能性を広げられるのではないかとわくわくしています。

その他、研究テーマは様々で、看護学の理解だけでは思いつかないような研究計画が多くあり、たくさんの発見に繋がりました。質疑応答に関しても、あらゆる分野の先生がいるおかげで質疑のやりとりがわかりやすく、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

最後に、会議の冒頭で月浦教授が「楽しんで」という言葉を強調されていたことが印象に残っています。その言葉通り、今回の会議ではベテランの先生方が楽しそうに議論している姿が印象的でした。研究者として、研究をこれほど楽しく語ることができるのは素敵だなと感じました。私にはこの先、学位論文を取得するという重責が待っているので、楽しんでばかりはいられません。しかし、先輩の先生方以上に研究を「楽しめる」ように日々精進していきたいと思っています。貴重な2日間を本当にありがとうございました。

相上律子
（金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 博士課程2年）

2021年4月5日

A01 研究会

第1回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：黒田尚輝、寺岡諒
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年4月12日

A01 研究会

第2回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：藤井芳孝
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年4月19日

A01 研究会

第3回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：山崎浩隆
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年4月20日

領域全体 メディア掲載

「実験医学」2021年5月号 特集「学術変革領域研究」にて本領域が紹介されました

2021年4月26日

A01 研究会

第4回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：小手川耕平
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年5月10日

A01 研究会

第5回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：小手川耕平
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年5月17日

A01 研究会

第6回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：原田新也
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年5月18日　11：00—12：00

C01 ミーティング

技能発達班（文化人類学）分担者ミーティングを開催しました　オンライン

2021年5月24日

A01 研究会

第7回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：山崎浩隆
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年5月24日

B02 メディア掲載

ヤフーニュース（個人）で研究成果の一部を記事として発信しました

「保育所に通うと子どもの発達にどういう影響があるのか？——欧米と日本のエビデンス」
柴田悠（B02ウェルビーイング班 研究代表者）

2021年6月3日

B02 メディア掲載

「日本経済新聞」にてインターネット調査の結果と研究内容が紹介されました

「保育の効果、まず現状分析　子ども庁の課題」
柴田悠（B02ウェルビーイング班 研究代表者）

2021年6月7日

A01 研究会

第8回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：藤井芳孝
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年6月14日

A01 研究会

第9回 生涯学知覚認知研究会を開催しました

報告者：黒田尚輝
熊本大学文学部F棟　対面・オンライン併用

2021年6月30日

領域全体 メディア掲載

「神経科学ニュース（2021年第4号）」（日本神経科学学会発行）に本領域が紹介されました

2021年6月～8月

D01 講習

東北大学社会教育主事講習にて「生涯学」の講義を開講しました　→詳細はp.30

オンライン

2021年7月10日　15：00—17：00

C01 研究会

第2回 技能習得と発達についての人類学的研究研究会を開催しました

15：00—15：20　「2021年度研究活動について」
金子守恵（京都大学アフリカ地域資料センター）
15：50—17：00　「インドネシアの薬物を使用する人々が置かれた状況
——保険医療にできることを越えるには？」
山田千佳（京都大学東南アジア地域研究研究所・特定研究員）
コメンテーター：座馬耕一郎（長野県看護大学・准教授）
（使用言語：日本語）　オンライン

2021年7月12日　10：00—12：00

B01 B02 研究会

社会学分野研究集会を開催しました

（使用言語：日本語）　オンライン

2021年7月17日　10：30—17：30

B02 講演

家族問題研究学会大会シンポジウム「子育てと『家族の幸せ』」で招待講演を行いました

「子育てと『家族の幸せ』——社会学の立場から」
柴田悠（B02ウェルビーイング班 研究代表者）
オンライン

2021年7月30日　13：00—16：30

領域全体 講演会

学術講演会「高齢社会を生きぬくための取り組み」を開催しました

主催：日本学術会議中部地区会議
共催：金沢大学、文部科学省科学研究費助成事業 学術変革領域研究（A）「生涯学」
（使用言語：日本語）
金沢大学自然科学大講義棟レクチャーホール
対面・オンライン併用

2021年8月24日 15：30—17：30

B01

研究会

高年社会参加班研究会を開催しました

中年期から高齢期への移行と家族経験の多様性——「祖父母という経験」の多様性と社会参加志向
講演：安藤究（名古屋市立大学大学院人間文化研究科 教授）
オンライン

2021年9月4日 14：00—17：00

C02

研究会

第2回 研究会を開催しました

14：10 「自閉症スペクトラム症者のエピソード記憶や感情調整」
山本健太
14：50 「石と女性——パラオの贈与財・ウドウド（udoud）をめぐるいくつかの変化について」
紺屋あかり
オンライン

2021年9月18日 13：30—17：30

C01

研究会

第3回 技能習得と発達についての人類学的研究研究会を開催しました

13：40—15：10 「バリのガムラン音楽における演奏技術の習得と発達」
鈴木良枝（東邦音楽大学）
15：30—17：00 「『伝統』の『継承』と状況的学習——石垣島と与那国島の事例より」
緒方良子（北九州市立大学大学院）
オンライン

2021年9月19日 13：30—17：00

B01

講演

公開シンポジウム「コロナ禍における社会の分断——ジェンダー格差に着目して」で講演を行いました

プログラム2「家族と医療現場に着目して」
筒井淳也（B01高年社会参加班 研究代表者）
オンライン

2021年10月7日

領域全体

ウェブサイト

領域公式ウェブサイトを拡充しました

公募研究班（全21班）紹介ページを公開
https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp/application/

2021年10月7日

B02

メディア掲載

ヤフーニュース（個人）で研究成果の一部を記事として発信しました

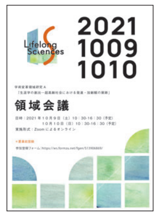
「保育・幼児教育は『出身家庭に起因する機会格差』を軽減する」
柴田悠（B02ウェルビーイング班 研究代表者）

2021年10月9日・10日

領域全体

研究会

「生涯学」第2回（2021年度第1回）領域会議を開催しました →詳細はp.32



70名以上に参加いただき、21件の公募研究班の研究計画発表に加え、総括班のメンバーが、方法論セミナーを実施しました。2日間にわたって、研究班や学問分野を超えた共同研究の可能性をさぐる議論を行うことができました。
オンライン

2021年10月9日 15：00—16：30

領域全体

セミナー

2021年度 第1回 領域内交流プログラムを実施しました →詳細はp.32

方法論研修プログラム：実験研究・調査研究・フィールド研究の方法研修プログラム——分野連携・融合への入口
（使用言語：日本語） オンライン

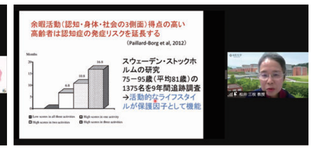
2021年11月20日 14：00—15：30

領域全体

シンポジウム

一般公開シンポジウムを開催しました 「『生涯学』がめざす新しい超高齢社会 ——ヒト・社会・文化をつなぐ人生100年時代の新しい『カタチ』」

宮本太郎先生（中央大学／北海道大学名誉教授）を特別講演者に迎え一般公開シンポジウムを開催しました。松井三枝（A03臨床心理班 研究代表者）・筒井淳也（B01高年齢社会参加班 研究代表者）・倉田誠（C02ヒトモノ班 研究代表者）の3名が、各班で取り組んでいる研究について発表しました。約200名に参加いただき、数多くのご質問をいただきました。パネルディスカッションでは、学問領域を架橋するような質問に対して、それぞれの分野からパネリストが回答しました。
主催：文部科学省科学研究費助成事業 学術変革領域研究（A）「生涯学」総括班
共催：京都大学
オンライン



2021年12月3日 18：30—21：00

C01

研究会

第4回 技能習得と発達についての人類学的研究研究会を開催しました

「行為の組織化と模範の不在
——ポルトガル共和国ポルト市のサッカークラブにおけるトレーニングと試合の過程から」
相原健志（関東学院大学国際文化学部）
コメンテーター：三津島一樹（京都大学大学院人間・環境学研究科）
（使用言語：日本語） オンライン

2021年12月11日 13：00—24：30

領域全体

セミナー

「英語論文の書き方セミナー」を開催しました

若手研究者国際発表補助事業・国際交流事業の一環として「英語論文の書き方セミナー」を開催しました。40名が参加し、「修士・博士論文の研究計画の質を向上するためにできること」「サイエンス論文の書き方の基本」のプログラムを実施しました。
オンライン

2021年12月10日

公募

受賞

第45回 日本高次脳機能障害学会学術総会にて、優秀ポスター賞を受賞しました

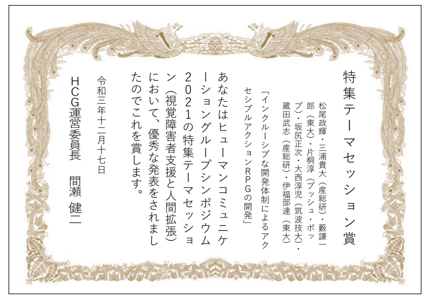
三浦佳代子（公募班E01-L109 研究代表者）

2021年12月17日

公募

受賞

電子情報通信学会HCGシンポジウム2021にて、特集テーマセッション賞を受賞しました



三浦貴大（公募班E01-L110 研究代表者）

業績一覧

2021年1月1日〜12月20日

論文

Hide, M., Ito, Y., Kuroda, N., Kanda, M., Teramoto, W. 2021. Multisensory integration involved in the body perception of community-dwelling older adults. *Scientific Reports* 11: 1581.

Kotegawa, K., Yasumura, A., Teramoto, W. 2021. Changes in prefrontal cortical activation during motor imagery of precision gait with age and task difficulty. *Behavioral Brain Research* 399: 113046.

Katsumi, Y., Kondo, N., Dolcos, S., Dolcos, F., Tsukiura, T. 2021. Intrinsic functional network contributions to the relationship between trait empathy and subjective happiness. *NeuroImage* 227: 117650.

Sugimoto, H., Dolcos, F., Tsukiura, T. 2021. Memory of my victory and your defeat: Contributions of reward- and memory-related regions to the encoding of winning events in competitions with others. *Neuropsychologia* 152: 107733.

Tsuruha, E., Tsukiura, T. 2021. Effects of aging on the neural mechanisms underlying the recollection of memories encoded by social interactions with persons in the same and different age groups. *Frontiers in Behavioral Neuroscience* 15: 743064.

Li, W., Tsutsui, J. 2021. Gender differences in intergenerational relationships in contemporary urban China. *Japanese Journal of Family Sociology* 33(2): 157-170.

Mitani, H. 2021. Effects of maternal adverse child experiences on parental maltreatment of children: An empirical study of mediating factors among Japanese mothers. *Child & Family Social Work* 10: 1111.

図書

岩原昭彦・松井三枝・平井啓(編) 2021、『認知症に心理学ができること——医療とケアを向上させるために』誠信書房。

松田英子 2021、『はじめての明晰夢——夢をデザインする心理学』朝日出版社。

カルドゥッチ、ベルナルド・J 他 2021、『カルドゥッチのパーソナリティ心理学 : 私たちをユニークにしているものは何か?』(翻訳 : 尾見康博／松田英子／小塩真司／安藤寿康／北村英哉)福村出版。

国際学会

Kaneko, M., Suzuki, N. *ZAIRAICHI* [Local Knowledge] of health care in Africa and the potential of Engaged Area Studies, International Workshop on Medical-Zairaichi, a Medical-Local Knowledge Research Network, Kyoto, 7 February 2021 (online).

Cho, M., Tsukiura, T. Dissociable neural mechanisms between temporal and spatial contexts in episodic memory for context-rich scenes, Cognitive Neuroscience Society 2021 Virtual Meeting, USA, 14 March 2021 (online).

Izumika R., Cabeza R., Tsukiura, T. Neural mechanisms of memory for facial expressions in young and older adults, Cognitive Neuroscience Society 2021 Virtual Meeting, USA, 14 March 2021 (online).

Masuda, Y., Park, P., Ueda, K., Ubukata, S., Murai, T., Tsukiura, T. Deficits of future thinking and autobiographical memory in patients with diffuse axonal injury, International Neuropsychological Society 2021 Mid-Year Meeting, Melbourne, Australia, 1st July 2021 (Hybrid).

Matsui, M., Ebina, K., Kinoshita, M., Saito, D., Nakada, N. Effect of cognitive reserve on working memory in patients with frontal lobe tumors, 2021 International Neuropsychological Society (INS) Meeting, Melbourne, Australia, 2nd July 2021 (Hybrid).

Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T. Bias towards trusting others is associated with insular activity before distrusting them, 62nd Annual Meeting of the Psychonomic Society, Virtual Conference, 5 November 2021 (online).

Watanabe, D. Sequential aspects of work-life-balance in later life, 43rd International Association for Time Use Research Conference, Barcelona, Spain, 28 October 2021.

国内学会

蝦名昂大・松井三枝・木下雅史・稲田祐奈・齋藤大輔・中田光俊、「前頭葉腫瘍患者のワーキングメモリに対する仕事の複雑性の影響」、第55回北陸心理学会、金沢、2020年12月5日(オンライン)。

佐藤邦子・小野靖樹・稲田祐奈・蝦名昂大・松井三枝、「双極性障害患者と健常者におけるレジリエンスとうつ傾向の関係」、第55回北陸心理学会、金沢、2020年12月5日(オンライン)。

増田柚衣・朴白順・上田敬太・生方志浦・村井俊哉・月浦崇、「びまん性軸索損傷による未来思考の障害機序」、第32回東北神経心理懇話会、仙台、2021年2月6日(オンライン)。

松井三枝、「脳損傷患者における認知機能研究」、日本認知心理学会第18回大会、金沢、2021年3月4日(オンライン)。

松井三枝、「認知機能からみたこころの健康へのアプローチ——予防とレジリエンスのために」、第10回金沢大学認知科学シンポジウム、金沢、2021年3月5日(ハイブリッド)。

金子守恵、「生涯学の創出に向けて(1)技能の習得と発達過程に関する人類学的研究」、日本文化人類学会第55回研究大会、京都、2021年5月30日(オンライン)。

倉田誠、「生涯学の創出に向けて(2)ヒト—モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究」、日本文化人類学会第55回研究大会、京都、2021年5月30日(オンライン)。

松井三枝、「精神・神経疾患の認知予備力についての検討」、シンポジウム「予測、予知、予防の認知神経科学」、第26回認知神経科学会学術集会、東京、2021年7月18日(オンライン)。

蝦名昂大・松井三枝・中田翔太郎・樋口悠子・鈴木道雄、「統合失調症の前頭葉性パーソナリテイ特徴に関する研究」、第15回日本統合失調症学会、富山、2021年4月9日(オンライン)。

木下雅史・松井三枝・蝦名昂大・齋藤大輔・中田光俊、「脳腫瘍術後における認知機能に対する認知予備力の貢献」、第44回日本脳神経CI学会総会、盛岡、2021年4月9日(オンライン)。

佐藤邦子・小野靖樹・蝦名昂大・樋口杏・松本一記・松井三枝・宮岸良彰・坪本真・内藤暢茂・菊知充、「双極性障害患者の心理機能の特徴について」、第198回北陸精神神経学会、富山、2021年8月29日(オンライン)。

樋口杏・蝦名昂大・松井三枝、「統合失調型パーソナリテイ傾向と認知機能の関係」、日本心理学会第85回大会、東京、2021年9月1日—8日(オンライン)。

滝口雄太・松井三枝・蝦名昂大・菊谷まり子、「コロナ禍における余暇活動の実態とメンタルヘルスに関する縦断調査」、日本心理学会第85回大会、東京、2021年9月1日—8日(オンライン)。

松田英子、「強迫傾向と睡眠の不調(2)——夢内容の質的分析」、日本パーソナリティ心理学会第30回大会、2021年9月25日—26日(オンライン)。

松田英子、「抑うつ傾向と睡眠の不調——不眠、悪夢、夢の情動、テーマおよび感覚モダリティの分析」、日本健康心理学会第34回大会、東京、2021年11月15日—21日(オンライン)。

王尚・松田英子、「中国におけるコロナウイルス・パンデミックドリームの実際——COVID-19予防のための都市封鎖が夢の内容に与える影響」、日本健康心理学会第34回大会、東京、2021年11月15日—21日(オンライン)。

講演

松井三枝、「認知機能改善療法の現状とこれから」、第8回北海道精神科認知リハ研究会、2021年6月12日(オンライン)。

三谷はるよ、「子ども期の逆境体験の将来への影響——孤立・孤独と自殺念慮」、第45回日本自殺予防学会総会、2021年9月4日(オンライン)。

柴田悠、「子育てと『家族の幸せ』——社会学の立場から」、家族問題研究学会2021年度大会、2021年7月17日(オンライン)。